



# 馬

昭和40年度

北海道大学馬術部部報

御会合御会食に御利用下さい。

北の管直管

# ほまれ第五

狸小路 7丁目

TEL 221 648

# 鯨 栄

大小御宴会御会合にご利用下さい

札幌市南3条西5丁目

TEL 220 487

TEL 228 773

# 目 次

表紙デザイン 高野文彰

1. 北大馬術部讃歌			
2. 巻頭言「希望」	部長	半沢道郎	1
3. 反省と今後の方針	主将	加藤正昭	3
4. 戦績及び行事報告	記録	三田新	7
5. 各馬調教報告			
昭和40年(北晨号調教日誌より)		小栗紀彦	13
北髯号について		山村勝	17
北翔号と共に		首藤義明	19
北瓊号		魚住俯司	20
6. 会計報告	会計	首藤義明	23
7. マネージングより		田中倬	26
8. 作業		魚住俯司	27
9. 飼育より		五十嵐章	28
10. 馬具より			28
11. 後援会事務局報告	O-B	三浦清一郎	29
12. 自馬紹介		阿部勝彦	31
13. 「北髯号」命名について		近藤喜十郎	35
14. 随想			37
思うこと		八木多賀子	38
雑感		黒沢道雄	39
うまくなろうとする者の心得			
-「下手くそ」もううまくなる!!-		高橋昭夫	41
黄色いべいじ -すすきの案内-		W・K	44
題名のない文		阿部勝彦	45
初めて試合に出た感じ		遠藤裕子	47
帯畜合宿に参加して		阿部絢子	48
自馬大貨車積の感想と一年坊主のツブヤキ		田中力	51
貨車にて		春田恭彦	52
落馬ノートより			53
15. 後援会員及び現役部員名簿			59
16. 編集後記			73

# 北大馬術部讃歌

作詩 三浦清一郎  
作曲 滝沢南海雄

はるき たれ ば だ い ち ひ か ー る  
 し ろ が ね の え ん さ ん ゆ め ほ う ほ う た り  
 た か ら か に い ま ゐ い な な り わ れ  
 ら し ゅ ん め の ほ ま ー れ あ り  
 ほ ま ー れ あ り ほ く だ い ほ く だ い お  
 お わ が ほ こ う わ れ ら し ゅ ん め の  
 ほ ま れ あ り

## 北大馬術部讃歌

一、春来れば、大地光る  
 銀の遠山、夢茫茫たり  
 高らかに 今ぞ嘶け  
 われら駿馬のほまれあり

二、時来たれば 旗をかざせ  
 青雲の旅路に 意気軒昂たり  
 高らかに 今ぞ嘶け  
 われら駿馬のほまれあり

三、雲流れて 旅路遙か  
 青春の孤仗 泥濘はばめど  
 凜然と 進みて行かむ  
 駿馬のほまれあるかぎり

北大 / 北大 / おゝ我が母校  
 われら駿馬のほまれあり

冬の札幌の街の象徴であつた、凍りつく雪に軋むあの懐かしい馬糞の音も、楽しく鈴の音もなく長い冬は終つて、今、融雪期の街には油の浮いた泥水を遠慮無くハネ飛ばして行く自動車に馬に代つて氾濫し、有名な雪融けの馬糞道も、春さきの馬糞風も、今では楽しい思い出の歴史的風物になつてしまつて、馬鉄時代を知つてゐる明治生れの札幌ツ子にとつて、街に馬が見られなくなつたことは本當に淋しく思う。

役馬の減少と共に街の蹄鉄屋は失業し、または転業して、今では市中で営業してゐる人が殆んど無くなつて、部では出張サービスをして貰う有様で、こんな事にも馬を飼う事の困難が表われている。

昨年度の部報に切角高い理想を掲げて、その実現に情熱を燃やし努力をしても、余りに大きな現実との隔りに、時にはその理想が藻抜けの殻となつて意気消沈することが多いが、それは理想が悪いのではなく殻が悪いのであつて、殻を悪くしている現実を改善することが重要であると述べ、融和した団結の力で困難を打破し、高い理想に向つて邁進することを要望したのであるが、茲にこの部を取り巻く殻の現状や改善についての希望の一端を述べて見ることにする。

比較的目然の環境に恵まれていた北大の構内も、諸施設の充実と共に農場用地が転用され、現在の第一農場の施設も次第に衰りつつある。厩舎や牛舎の老朽化、新施設の導入に伴つて近い将来に改築や移転問題が持上ることが考えられ、部も今までの様に安易に農場のお世話になつてゐる事が不可能になることを考えると、そろそろその対策を樹てることが必要である。現在の第二農場が他に移された跡の、あの古いニューイングランドの併を残してゐるパインの付近に馬場を新設し、記念建物として保存されるであろうパインの近くに新しく厩舎を建て、その中に部室を作つて貰うとか、将来の構想を考えてゐるが、学生部でも同じような考を持つて計画してゐるようなので意を強くしてゐる。

昨秋農機庫が旧のカンカン場を改築して作られた為に、東側のパドックと現在の馬繋柱の場所および水槽を他に移すことが必要となり、その代替地として、厩舎の西側一帯を厩肥小舎の西にある古い屋根の低い収穫庫も含めて使わせて貰い度いと考え、農場と交渉を始めてゐるが、雪融後よく実地を見て実現を期し度いと思つてゐる。この収穫庫は少し手を加えて部室に使うように出来ればとも考へてゐるが皮算用に終るかも知れない。合宿所も近くに欲しいものである。現に使用してゐる厩舎と老朽化し、馬房も狭く数も少なく、使用馬全部を繋蓄することが出来ないのも、仮設的に増築して、更に馬房二つ位を作つて貰い度いと考へてゐる。

今年の冬は雪が多く馬場が使えないので路上騎乗を止むなくされたが、不慮の事故を惹起し、部員諸君の勤勞奉仕で馬場の除雪をしたのであるが、冬の長い雪の多い本道には是非覆馬場が欲しいものと思ふ、耐用二十年位で古材を使つて丸太組程度のもので建てられたら安く出来そうに思ふ。

馬場に姿見の大きい鏡も欲しいし、雨曝しにして置く為に、損耗の甚しい障子の格納庫を作ること多年の懸案であるが、未だに実現されないでゐる。

農場から現物の飼料の給与が次第に減つて、その殆んどを講入しなければならなくなつたので、飼料費が累み、部員の負担が多くなるので、少しでも安い飼料の入手を望み、懸案の刑務所から払下げを受けることについて交渉した結果、札幌矯正管区の好意によつて、今秋の収穫期からは市価より余程安い燕麥の払下げを受けられる見通しがついた。

馬術部施設の移転、厩舎、部室、覆馬場の建築等は将来の問題としても、さし当つて馬場や厩舎の小修理、障害の新設、馬具の整備、部室の宿泊設備の保全、その他欲しいもの、改善したいものが沢山あるが、馬を飼うだけでも苦しい現状では学生部もなかなか手が出ない有様で、結局先輩や篤志家の後援を仰ぐことになるが、大学の課外活動が先輩や篤志家の援助を受けるにも限度があると考えられるし、また部員の個人的または集団的のアルバイトによる資金作りも余り学業の邪魔になつたり、学生らしくないものは許し度くないと思われるので、何とか他に良い方法や手段が無いものかと苦慮している。学生馬術連盟を通じて中央競馬会等からの重点的の援助があればと願っている。

援助と云えば先輩の特別の厚意による北騎号（ジュビター号）を後援会から借りて居るが心配した去勢手術の後の経過もよく、食いいいので青草が出るようになつたら、もつと肥つて腰も段々よくなつて、先輩諸兄の期待に添える様になると思う。先輩諸兄が最近の北大の学生は馬術（特に馬場）の基礎練習が出来ていないことを嘆じて、あの馬を使える様にして下さつたのであるから、大切にしながら尚調教を進め、よく調教された馬に乗つて実際に体験することにより、平衡感覚、柔軟な拳の操作、強く適切な脚の養成と使い方等の基本を馬から教わり、自ら感得して訓練に励んで欲しい。

熱心に部の為めに活躍して下さい下さつた新卒業生を送り聊か淋しくなつたが、新学年と共に多数の新入部員を迎え、春と共に活潑な活動が始まることであらう。諸君と共に明るく、楽しく、真面目な部として益々栄えるよう願つて筆を摘く。



## 反省と今後の方針

主将 加藤 正明

新しき午年を迎え、平凡なる望みながら、又今年こそはという思いを深めております。

### 〔戦績について〕

昨年を振り返つてみますと優勝の声は国立七大学戦（名古屋、森林公園）および札幌目馬馬術大会の数種目にて一位ということとあまり華々しい戦績はおさめられなかつたというのが事実です。団体・学生自馬の不成積（唯一つ、新馬北辰号の中障碍一落下の成績が喜びを与えてくれましたが、）又全日本は不注意により出場できず、全くふがいない結果に終つてしまいました。たことにつきましては先日お送りしました特報にて詳しく述べておきました。

### 〔馬匹について〕

馬達につきましては、北颯・北翔号に加え北辰号、新馬北彗号のチーム力の強化を期待しております。昨年北翔号は裂蹄にて丸一年、競技に出場できませんでしたが、今年こそはその実力を発揮させ、北颯号は今まで以上の戦績をおさめられるよう、又北辰号の総合への出場にも気を配っております。北彗号は入厩後、一年半を経過しております。途中去勢の手術など迂余曲折があり思うように進んでおりませんが焦らず、調教が間に合えば競技に出場するつもりでおります。昨秋学生自馬の折にいた

だいたジュビター号は北颯（はくりゆう）号と命名し、農場との関係も完全に落着いたわけでもありませんがなんとこの部の厩舎に置くことが許されました。このことについて皆様いろいろと御迷惑をおかけいたしましたことを深くおわび致します。

現在の繋養馬は北颯・北涼・北揚・朝清・北環・北翔・北辰・北彗・北颯号の9頭であります、この他に昨年6月2日誕生いたしましたデコこと、北秀（はくしゆう）号（父北彗号・母北涼号）は現在苫小牧・社台の松本牧場に預つていただいております。技術面より言えば北颯・北翔・北辰・北彗号は総合馬を指すとともに競技での活躍を期待し、北環・朝清号はどちらかと言うと複合馬であります。北涼・北揚号は馬場ができず障碍のみということになり、北翔号においては近頃我が部にて敬遠されてきた馬場馬術を彼を通してやり直すつもりであります。若干腰の弱さが目につきますが大事にして立派に成長させるよう努力いたします。尚北涼・北揚・朝清・北環号は競技での活躍を望むよりもむしろ練習面において活躍してもらいます。

悲しいことではあります。北颯号の入厩に伴い一頭離厩させねばなりません。人間の身勝手ではありますが、余生を牧場にて送らせるような余裕がないのが現実であります。（離厩馬はまだ決定していません。）

### 〔試合について〕

今年出場しうる試合は多数ありますが学生ですので当然限定されてくると思います。まず隔月位に行なわれる札幌目馬馬術大会それに東日本馬術大会・北海道馬術大会・国民体育大会・全日本馬術大会・全日本学生自馬競技大会を考えております。

貸与馬術、即ち国立七大学・学生選手権・王座決定戦も出場しうれば出場するつもりであります。

〔籍について〕

部の籍につきましては、まだ農場ということになっておりますが、農場との関係は部員の望むと望まざるとにかかわらず悪い方に向っております。又厩舎の老朽化も目立ち配線のいたみや飼料置場としている厩舎二階の床などはグラグラしております。そこで厩舎の新築ということになります。農場は言うにおよばず、学生部（半沢先生から学生部に申請書を出して下さったのですが）としても馬術部のような大きな支出のある部を完全に所属させることはできぬと言っている現状で厩舎新築は十年位先の話になるとのことです。農場は場所が良いから自分達で建てなさいと言つてくれますが何分大きな建物ですので部員の作業では限界があります。後援会員の御協力を乞う次第です。（農場関係につきましてはマネージャーの報告をお読み下さい。）

〔努力と和について〕

馬の事はこれ位にしておきまして私が主将となりました折、標語として「努力と和」ということをかけました。一に努力、二に努力、三に努力。我々学生は学問ということがあります。学問なくしてなんの馬術があろう。授業と部の両立、又他に思想との、他の活動をしている場合はそれらのこととの両立。何にしろ馬を通し様々な方面の活動を行つているのでからそれらとのかねあいということが問題となつてきます。しかしそこで考えなければならぬのは馬術をやるうと思ふ者、他の欲も適度におさえそれに邁進する必要があるのではないかと思ひます。

つまり手広く浅くいろいろやつてみるのではなく数をへらしでも深くやる必要があると思ふ。若いだから様々なことをやつてみたいと思ふのが馬術をやるうと思ふもの、他の事を止めてでも馬に熱心になつてもらいたい。馬狂（うまきち）という言葉があるのならば馬狂にならうではないか。これがため人生の指針を見失うことはなからう。否、馬術こそ青春を賭けて励むに値するものにちがいない。これはもの一面のみからしか見ていない人間の言うことだと言わず考えてもらいたい。又和ということ、人間と人間の触れ合いこれは難かしいにちがいません。しかしこれは作るものではなくできて行くものだと思います。馬術部の人間である限り馬乗りである限り、馬を介した和であり、触れあいでないでなくては、それは確固たるものではないと確信します。そしてその活動が正しいものならばまた和もうまく行くものと信じます。これらをこまごまと考えていては肝心の馬術がやつて行けなくなります。何もそれを無視してもよいなどと言つていられるではありません。しかし運動部として試合を目指し結集するところは和はできるものと信じます。

馬術は芸術であると共に人間の修練の場でもある。馬場馬術もよしイタリア式もよし大きな見地に立ち北大馬術部を發展させるつもりです。皆様の御支援と御指導をお待ちしております。

次に各馬匹の責任者名を掲げておきます。

昭和四十年年度現在

北 颯 田 中 倬（医学部一年）

お酒飲みたし おチヨコなし  
ビール飲みたし グラスなし  
カクテルしたし 器具はなし

酒類の御相談は

# 沢田商店

正門前 TEL 71-0824

北 北 北 北 北  
 粁 辰 翔 涼  
加 山 小 首 加  
藤 村 栗 藤 藤  
正 紀 義 正  
昭 勝 彦 明 昭  
(工学部三年) (工学部三年) (工学部三年) (工学部三年) (工学部三年)

ジ ン ギ ス 汗 専 門 店

# 義 経

宴会、コンパにご利用下さい

本 店 北 1 8 条 西 5 丁 目 T 71-6801

支 店 北 7 条 西 5 丁 目 T 71-2359

札幌陸運局認証工場

# 北大モータース

(オ) サイクル)

小 野 忠

札幌市北18条西5丁目

TEL (71) 7076

馬具・鞆製造販売修理

# 中野馬具店

札幌市北13条東1丁目石狩通

TEL ③-7876

乗馬用ズボン専門店

松田屋

# 田辺洋服店

札幌市豊平四条六丁目平岸通り

TEL 81-7341

札幌競馬  
道管競馬御用達  
乗馬連盟



○決勝リーグ

	麻 猷 大	北 大	岩 大	
麻 猷 大		○	○	2勝
北 大	×		○	1勝1敗
岩 大	×	×		2敗

1位 麻猷大  
2位 北大  
3位 岩大

〔北大関係の部詳細〕

第2試合

北大	馬名	麻猷大
山村 -7	アイシホー	0
小栗 -120	浪ロン	-120
加藤孝 -21	フロステイ	-4
黒沢 -86	光 楽	-74
高野 -4	カテホマレ	0
-238	計	-198

第3試合

北大	馬名	岩大
山村 -4	アイシホー	-0
小栗 -120	浪ロン	-130
加藤孝 -17	フロステイ	-21
近藤 -4	ニュースタイル	-19
高野 -7	カテホマレ	-8
-154	計	-198

6月13日 春季部内競技会

6月15～23日 王決予選の為の強化合宿

6月24～27日 全日本女子学生馬術大会（於馬事公苑）

八木多賀子、馬場で6位なるも障碍で大量減点をくい惜しくも16位に終る。

6月26～28日 王決予選兼東北、北海道学生馬術選手権大会（於岩大）

○予選トーナメント

北大ー岩医大、福島大ー帯畜大、酪農大ー岩大ー東北大

この結果北大、帯畜大、岩大および敗者復活戦に勝ち残った福島大が決勝リーグに進出

〔北大関係の部詳細〕

北大	馬名	岩医大
加藤(孝) -192.5	岩 風	-182.1
高橋 -162.5	桐 駒	-172.5
黒沢 -172.5	月 光	-162.5
近藤 -13	勇 玉	-122.5
高野 -11	雪 雲	-125.5
山村 -19	隼	-20.5
-570.5	計	-886.0

○決勝リーグ

	福大	帯畜大	北大	
福大		×	○	2勝1敗
帯畜大	○		○	2勝1敗
岩大	×	○	○	2勝1敗
北大	×	×		3敗

北大は決勝リーグで全敗し王決進出ならず

[北大関係の部詳細]

第1

北大	馬名	岩大
近藤 -192.5	勇玉	-11
高橋 -162.5	扇清	-166.5
山村 -192.5	北水	-193.5
高野 -20	雪雲	-4
加藤孝 -104.5	月光	-192.5
小栗 -162.5	桐駒	-162.5
-834.5	計	-730

北大	馬名	福大
高橋 -12	中雲	-7.75
小栗 -16	月光	-217.5
加藤孝 -136.5	玉栄	-80.5
高野 -4	雪雲	-20
近藤 -162.5	岩風	-132.5
山村 -152.5	桐駒	-172.5
-483.5	計	-435

北大	馬名	帯畜大
加藤正 -7	中雲	-4
近藤 -3	勇玉	-8
増田 -37	雪雲	-8
-114.5	玉栄	-24.5
山村 -181.5	桐駒	-192.5
高野 -20	隼	-8
-363	計	-255

7月6～8日 国立七大学体育大会 (於名古屋森林公園)

○予選リーグ

A

	北大	東北大	九大	
北大		○	○	2勝
東北大	×		○	1勝1敗
九大	×	×		2敗

B

	東大	名大	京大	
東大		○	○	2勝
名大	×		○	1勝1敗
京大	×	×		2敗

〔北大関係の部詳細〕

北大	馬名	九大
山村 -132	北上	-5.25
黒沢 -0	白菊	0
近藤 -110	松緑	-110
高野 -67	森山	-49.5
小栗 -21	隼風	-250
-330	計	-414.75

北大	馬名	東北大
高橋 0	白菊	0
小栗 0	工駿	-43
加藤孝-194	波月	-134
近藤 -3	勝誉	0
高野 -4	北上	-32.75
-201	計	-209.75

○決勝戦

北大	馬名	東大
高野 -0	北上	0
黒沢 -3	白菊	-3
山村 0	勝誉	0
近藤 -13	豊光	-18.25
小栗 -100	松緑	-110
-116	計	-131.25

三位決定戦

名大 - 東北大

-491 -660.75

1位 北大

2位 東大

3位 名大

※ この大会で小栗は最優秀選手に選ばれた。

7月10～16日 1年目対象合宿

7月25日 札幌市民大会

○一般自馬中障碍飛越競技

一位 札乗夕 岩坪 (山透)

二位 北大 高野 (北颯)

三位 札乗夕 山本 (洋孝)

○一般小障碍飛越競技

一位 北大 山本 (北颯)

二位 北大 八木 (北颯)

三位 大往短大 赤裏 (山透)

北大出場選手

山本 (北颯) 阿部 (北揚)

三田 (朝清) 池田 (北揚)

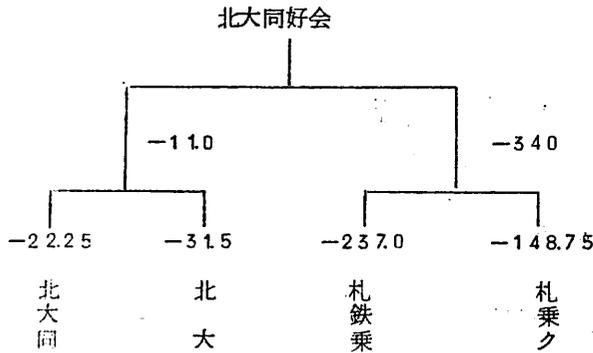
八木 (北颯)

○六段飛越競技

一位 札乗夕 岩坪 (山透)

二位 北大 高野 (北颯)

○貸与馬中障碍団体戦



北大出場選手

高倉、五十嵐、加藤光

8月28～29日 北海道馬術大会兼団体予選 (於畜大)

○一般自馬中障碍飛越競技

北大出場選手

一位 帶畜大	吉井 (竹若)	小栗 (北晨)	八木沢 (北揚)
二位 北大	小栗 (北晨)	山村 (北環)	加藤正 (朝清)
三位 旭乗夕	神岡 (旭峯)		

○婦人小乗小障碍飛

一位 帶乗夕	清水 (雲霧)
二位 畜大	山戸 (雲霧)
三位 北大	仙波 (北環)

○一般自馬複合

選手名	萩原	久保田	小栗	高野	須藤
馬名	プラントモア	春洋	北晨	北飄	広風
所属	畜大	畜大	北大	北大	畜大
馬場得点	80	72.33	69.67	76.33	78.33
野外騎乗	+2.6	+3.0	+1.1	0	-3.725
障碍減点	-8	-8	-8	-3	0
計	98	94.33	72.67	68.33	41.28
序列	1	2	3	4	5

北大出場選手 高野 (北飄) 小栗 (北晨) 山村 (北環) 加藤正 (朝清)

○六段飛越競技

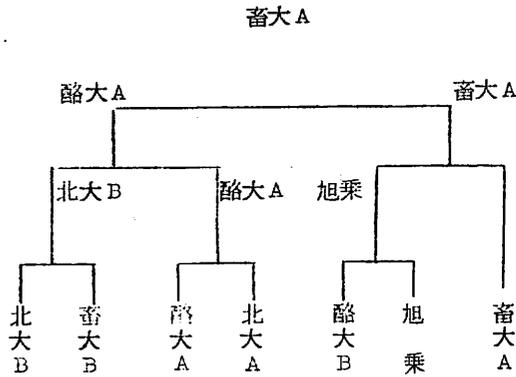
北大出場選手

一位 畜大	飯島 (碧雲)	高野 (北飄)
二位 札乗夕	岩坪 (山透)	

○大障碍飛越競技

一位 酪農大 中島 (デイリー)

○ 一般貸与馬団体戦



北大 A チーム

首藤、宮林 (札乗ク)

北大 B チーム

黒沢、山崎 (札乗ク)

この結果小栗 (北晨) は団体出場権を得た。

8月31日 学生選手権第一次予選 (於畜大)

第一次予選 (馬場) の結果山村は第二次予選に進出

第二次予選にて失権

10月17日 秋季部内競技会 (於北大)

10月25～28日 国民体育大会 (於岐阜笠松競馬場)

小栗 (北晨) 中障碍 22位

六段、複合 失権

11月6～9日 全日本学生自馬大会 (於馬事公苑)

高野 (北驪) 耐久にて失権

加藤正 (朝清) 耐久にて失権

11月10～18日 関東北女子鞍の為の強化合宿

11月20～21日 関東北女子馬術大会 (於福島競馬場) 及び全日本女子学生馬術大会第一次予選

○ 団体戦

○ 個人戦

1位 成城大、2位 中央大、3位 早稲田大

1位 古柳 (成城大)、2位 前川 (日大)

北大出場選手

北大出場選手

北大 A 木木、仙波

八木、仙波、遠藤、阿部

北大 B 遠藤、阿部

この結果団体戦で北大 A は 4 位

(文責 三田 新)

昭和四十年

四年目 小栗紀彦

(三月一九日)

一生忘れる事のないだろう一年間はすでに始まつていた。三月の積雪はあまり多くなかつた。北麓号は雪上の細い蹄跡に置かれた小さな平行横木を連日、繰返し繰返し飛ばされていた。確かに逃げる事は出来なかつた。しかし拒止を恐れて、脚を強く使うように心掛けていたため、不安定な騎座はますますその度を増し、革は硬く当つた。この事は彼女が障礙に幾分突進気味に向う原因の一つと思われた。踏切りは次第に安定してきたが、新馬故か、大きく飛んだ。停止は衝に重つた。

(四月八日)

頬を撫でる風は春だつたが、馬場は汚れて固まつた雪に覆われていた。連日の除雪作業で我々は疲れていたが、日に日に広さを増す半年振りの地面は表現出来ぬ程なつかしかつた。春が来た。

(四月二十三日)

新しい一年生が練習に加わつた。速歩を伸長しようとし、駈歩になつた時、そのまま七〇〇mの駈歩を五分間続けた。駈行。ひどく駈行した。脚に柔順に反応し、滑らかに伸長速歩に移るよう、一つの手段として三回目であつたが、第二回の札幌自馬大会を目前にして。大きな失敗だつた。診断は挫折だつた。

(六月七日)

午前三時に米沢を発ち、札幌に向つた。弱かつたためか、王座予選、七帝戦のため競技会に馴れておこうという心掛が悪かつたためか、敗れた。

すつきりした頭で、数日間を思い浮べた。主将会議が終つた時、帰る汽車はもうなかつた。駅前の旅館に山村君と泊る事にした。トロツコの良平が思い出された。翌日の馬配を考えてから眠つた。第一日目東北大、宇都宮大には勝つたが、二日目麻布獣医科大に敗れ、二位に終つた。六月二日には仔馬が誕生していた。

(六月十五日)

昨日の襟裳岬は霧が流れて寒かつた。波の音がベントで静かに聞かれた。

然別湖への道は快晴だつた。湖畔の黄昏はどこまでも静かだつた。黒沢君にすまないと思つた。黒い対岸に赤い炎が三つ小さくゆらいでいた。髻山は小波で細かく震えていた。山際の月は満月だつた。

(七月四日)

朝清に蹴られた右足を気にしながらの王座予選は決勝リーグで、全敗を喫した。一つのつまずきで、競技に全力を注げなかつた。立ち直つたはずだが……。

白井での合宿四日間を得たものは大きかつた。飛越馬は如何なるものがあつても前に進むという事を一文字号に乘せてもらつた時、つくづく考えさせられた。我々は下手くそだつた。

(七月八日)

七帝戦は名古屋の森林公園で行なわれた。一日目九州大学、東北大学に小差で勝ち、決勝進出が決つた。二日目はゆつくりと観戦し、ポートを漕ぎ、公園を散策し、瀬戸に遊び、箏曲「落葉杏頃」に耳を傾けた。

勝つた。蟬の声を感じられた。小差だつた。寂しかつた。が、いこい、がやけにうまかつた。賞状を手にした時、うれしく感じられた。中央線に乗り、高野君と二人になつた時しみじみとうれしかつた。薄氷を踏み続けた試合であつた。

(八月十五日)

祖父の病状が思わしくなかつたので、一ヶ月間も馬に乗らずに、岐阜で過した。道大会をあきらめて、札幌に戻つたのは八月六日だつた。四十五日振りに乗つた北晨号は前によく歩いた。

初心者大会の中障碍飛越の出場順番は十二番だつた。出番が近づくにつれ、喉が渴いた。胸の奥からこみ上げる吐気には困つた。与えられた課題を、与えられた二分間に、過失なく成し遂げる事は大きな負担だつた。その時の「過失なく」は単に減点なくゴールする事ではなく、人馬一体となる事だつた。自分は未熟だつたがそう思つた。唾も出ない程緊張しきつた神経は遠慮なく責続ける刺戟に圧倒され、膨れ上つた脳味噌から血潮が退いていくのがぼんやりと感じられた。飛び下りて、口笛を吹いた。十一番が終つていた。

連続障碍通過後、右回転、脚の不足のためか、急回転のためか、ガクンと停止、必死の脚で前に出した。自然木は人馬共に迷つて落下。減点七、北晨号にただすまなかつた。北大馬場は

曇天だつたが、夏は盛りだつた。

(八月二十八日)

出てみるという軽い気持だつたので、楽だつた。準備馬場で駈歩からの停止を繰り返した。ひどく重つた。無理な停止を繰り返したためか、首を前後に大きく振る様になつた。ここで総合をあきらめた。ただ調教番番で失権だけはしたくなかつた。二十五日に負つた左前肢の外傷は痛かつた。馬場内での待機中は手綱を伸して、常歩をしていた。速歩の右輪乗から駈歩に出した。軽かつた。非常に軽かつた。自分でも驚いた程だつた。入場許可に従つて、入場した。最初の停止も軽く出来た。駈歩運動はたいへんだつたが、北晨と自分が初めて踏んだB馬場にしては上出来だつた。敬礼をした時失権しなかつた事がうれしかつた。

中障碍の下見が出来なかつたのは不覚だつた。忘れる事の出来ない第七障碍があつたのだから。高さ八十、九十、八十、幅二m五十の山形三段だつた。乗り手の方がその大きさに圧倒され、馬に任せる事を忘れてしまつた。伸び過ぎ、馬は踏切りを誤り、二mも手前から飛越を始めた。ためにひどく遅れ、座骨で鞍を妨害した。第三横木を後肢で落した。自分は騎座を起した。挙が上つたが、下げる事が出来なかつた。若い人馬共に。減点四、二位に成るとは思つてもみなかつた。「扶助が荒い、もつと適確な扶助を柔かく使えば、今の人馬でもつと点が出るはずである。又馬は行く気があるから、もつと余裕を持つて、コースを回るようにした方がよい。」と鎌田先輩に注意された。

持久力審査が迫っていた。北颯がドラムを横つ飛びに通過した。朝清がドラムで失権したのを見てスタートした、五〇〇mを保った。①自然木（高さ一〇〇）はうまく飛越、②壕は左に寄つたが、速歩で強引に飛び込んだ。③四mの壁、たてがみにつかまることなく口についていけた。④パンケット飛下り（高さ一五〇）はつまつたが、脚で飛び下りた。右回転の後、直線鋭角に左、採草地のへりにそつて走り、林に入った。二五〇mの速歩にした。時間が気になつた。林を出ると農道だつた。

六〇〇mの駈歩にした。⑤柴（高さ一〇〇、幅一〇〇）は左右にふれたが脚と拍車で飛越、登り坂の途中にいじわるく置かれた、⑥タタミ（高さ八〇、幅一五〇）⑦石垣（高さ一〇〇、幅一五〇）は問題がなかつた。しかし飛越後、重り出し、ブレーキのきかない車に乗っているような感じがした。電柱を三本平行に並べてあつた第八障碍（高さ一一〇、幅一五〇）は大きかつた。その上彼女を押えられなかつたので、二m位手前で踏切つた。ものすごい飛越だつた。幸い遅れなかつたので、無事通過出来た。スタートの横にあつた、⑧ドラム（高さ九〇、幅一〇〇）をうまく飛越し、その後、押さえるのにはいへんだつたのが、北晨疲れて来たか、脚を強く使わなければスピードが維持出来なくなつた。農道からはずれ、右へ回転、⑨小さながけを飛び下りる。河原に出た。常歩で⑩浅瀬を渡つた。土手の上の道はススキに覆われて、よくわからなかつた。⑪再び浅瀬を歩いて渡つた。農道に出たので、駈歩にした。標識を見落し、右へそれた。早く気がついたので、何とか元へ戻れた。このために増点が十数点減つた。増点してつた特徴ある立木が見えた。

二十m後にS字状の細い道から不意に現われる十三障碍、乾草（高さ八十、幅一五〇）を予想しつつ脚を使つた。彼女は少しつまり、前肢でひつかけて乾草の山をひつくりかえして通過した。右へ曲つて、⑫レンガ（高さ一〇〇、幅八十）が遠くに見えた。前走の大雪号拒止後、再行せんとして、減点区域に入つたのが十m手前に見えた。頭がぼけて、どうしていいのかわからなかつた。木雪号拒止。あつと思つた時はそのすぐ横で踏切つていた。すばらしい飛越だつた。完全に一致できたと感じた。その後、異様な音が聞え出した。彼女の心臓が喉から飛び出しはしないか、肺がよじれ、腸が捻転しているのではないか。速歩にした。一步毎にその音はひどくなつた。でもそうなら、走れるかしらん。朦朧とした頭でそんな事を考えた。速歩は二〇〇m位だつた。時計を見た。増点の事は考えない事にしたが不安だつた。⑬パンケット（高さ一一〇）飛び上りが残るだけだつた。それで失権したら彼女と共の苦勞は報われない、こんな事が頭をかすめた。駈歩をやれないのではないかと思つていたが、駈歩をやつてくれた。パンケットまでの数十mは彼女と一体になつたように錯覚した。共に苦勞し、共に苦闘し、共にはげましい合い、共に散策し、共に信じ合つて来た一年間が、この野外騎乗のこの駈歩に至つて、真に一致出来たと感じた。彼女は朦朧とした頭の手足となつた。死んでもいい、本当にかえつて、右へ回転、最後の減点区域に突入、祈る気持だつたやつた。すばらしい飛び上りだつた。帯広は快晴で暑かつた。

(八月二十九日)

前日は夜の十時まで水道水で肢を冷した。北晨は元気だったが、乗手は疲れていた。余力審査の最終障碍に向つた。下見の時より十cm低く感じた。飛んでもいいのかなと思つているうちに馬は踏切つた。遅れた。後肢で落下、ゴール後しばらくぼんやりとしていた。

遠征中に食事と、睡眠とを充分にとるべきだった。競技中ぼんやりする時間があつたなど。頭でなく体でついで行くべきかも知れないが。中障碍マイナス四、二位、複合、馬場六十九・六五。野外騎乗十一。障碍マイナス八。計七十二、六五。三位だった。あまりの好成績に自分でも驚いた。

(十月二十五日)

田は黄金色に波打ち、空はどこまでも青かつた。柿の実の朱が一際鮮やかだった。競馬場は木曾川と名鉄名古屋本線と南と西とで接していた。岐阜笠松での北晨は元気だった。彼女が特急電車の警笛に驚くのは困つた。開会式の前日恩田さんが来てくれた。たまらなくなつちかつた。十月二十五日は午前中に複合予選、午後に中障碍が行なわれた。出場前、早目に競馬場に行き、準備運動を始めた。練習馬場に小さな障碍がなかつたので、仕方なく一m位の障碍を数回飛んだ。呼び出される少し前に、不安になり、一m二〇の横木に向けた。拒止。これには驚き、あわてた。突かかり気味に前にとんどん出ていたので、脚を使つてなかつたと思われた。よく見せてから、脚を使い、十月三日の記録会の時に覚えた挙で、馬体が伸びきらないように注意しながら向つた。前肢で大きく落下。横木を

八十にしてもらつて、数回飛越後、待機馬場へ向つた。彼女は興奮気味に突かかつた。常歩で歩いてるうちに落着いて来た。馬場に入ると広く感じた。スタート後、袖に植木鉢の飾つてある第一障碍が眼下へ入つて来た時、北晨は止つた。一瞬、何が起つたかわからなかつた。拒止をした事に気付き、障碍の左へ出た時にたいへん楽になつた。競技場に入つて彼女が前に出なかつた事にやつと気付いた。回りきれない事を心配していたので、脚を使つていながかつた。「貸与馬競技のつもりで」といわれた事をやつと思ひ出した。第四障碍でも止つた。自然木の三段(高さ一二〇、幅一三〇)だった。その時は何故止つたかわからなかつた。失権がそこまで迫つたような感じがした。拍車と脚とで彼女を前へ出し、やつとゴール出来た。失権をしなかつた馬の中で最も落点(一四、二五)が大きかつた。予選は勿論通過出来なかつたが、午後の中障碍のためにたいへん役立ちつた。

中障碍の出場順番は七三番だった。日は大きく西に傾むいていた。ただ脚を使つた。第一障碍は大きく前傾した。後肢をあてたが落下しなかつた。第十一障碍は水槽横木(高さ一一〇、幅一〇〇)で、右へ直角に回転すると先程拒止をした自然木三段があり、横木を載せて高さ一三〇、幅一五〇にしてあつた。十一障碍は初めてのものだったので、拍車と脚をより強く使つた。飛越後、予定より行きすぎて、右へ回転した。斜め左から自然木へ向う事になつた。馬体が十二障碍に垂直になつた時は踏切る二完歩前だった。つきつた。折る気持で脚を使つたが、前肢が横木にさわつた。落下。最後の三段横木(高さ一三〇、

幅一五〇）は美しく飛べた。自分と彼女とで実力以上を發揮したように思つた。減点四だつたが満足だつた。瓜跡の様な月が夕焼の空に浮んでいた。

（十月二十七日）

スタート許可の合図の前にスタートして、失權した。北晨にも、皆にもすまないと思つた。夕闇の迫つた競技場が広く空虚に感じられた。ただ菊の大輪が白く美しく目に映つた。

（十一月三日）

全日本のバルクールドシャツスを畜大の久保田君が春洋弓で制覇した事は自分に明るい希望を与えてくれた。

札幌は長い冬が始まつていた。

## 北彗号について

四年目 山村 勝

はつきり言つて嫌いだつたとも言える北彗号に、大好きだつた北彗号を離れ、ヒヨんな事から乗るような破目になつてしまつた。丸五ヶ月、「人には添つて見ろ、馬には乗つて見ろ」とは良く言つたものだと思ふ。つきあつて見ると、まだ手入れは少々うるさいが、彼（？）も仲々良い所がある。まだヤンチャが抜けきらず暴れて見たい時もあるのだろうが、割と物覚えも良いようだ。しかしまだ皆に親しまれるようにならないのは残念である。

さて今迄の経過を簡単に日記より拾いながら書いてみよう。

## 馬に馴れるまで

新馬に乗るようになったのは勿論始めて、それに部に今迄居た馬と違い、若く元気があり過ぎ、それに人間の未熟さから、馬に馴れる迄に大分長い時間を費したようだ。

まず馴致をやる。練習時間の三分の一以上は必らず野外、主に構内を準備運動、整理運動を兼ねて、常歩で歩き回つた。（これは今でも変りないが）始めの内は必ずと言ってよい程、ハネられた。その場所は大抵決つていて、農場の奥の採草地、恵旭寮の裏といった広い所、それから直線の道路でも時々飛上つて、それから猛然と走り出す。嬉しくて走つてみたくなるのだからか、悪気はないのだから、乗つてゐる方にすれば落ちない様にするのが精一杯という感じであつた。又部以外の馬を見るとすごい勢いで向つて行こうとする。いずれの時も急に頭頸を上げハミをうかせ、後駆をハネ上げて飛上る。それから脚に不従順なのと人間の脚の使えなさで力一杯使つてゐるつもりでも仲々前へ出てくれず、泣きたくなるような毎日の連続で、一時間半の練習が終り下馬するとホツとした。これを何とか直さなければならぬ。しかし毎日、精神的、肉体的にバテた。

八月七日 停止からの発進を拍車を使わずに行うも、後半遅れてくると仲々出ず。又蹄跡を離れると直行進が下手で、左右に振れる。

このように脚に対して全くといつて良い程不従順だつた。特に後半になると、怠慢になりますます歩度が伸びなくなる。又右駢歩が下手で右輪乗をやりながらも左駢歩で発進してしまふ。といった状態であつた。

その後道大会、北日本と続き九月前半は乗れずに過ぎてしまつた。前から考えていた事ではあつたが、自然馬術方式を取り入れてやつて行こうと決心する。勿論総合馬を指す事に交りはない。

### ○ 手術及びその後

十月一日、遂に去勢手術、全くかわいそうだつた。他に仕様がなないものか。四本柱のコンクリートの上に倒され、足を縛られた姿を見て憤懣やる方なし。病院にも来なくなり、人間不信に陥いつて、ひねくれるのではないかと心配。充分かわいがつてそれらを排除してやらなければと決意を新にする。

十月二日 一晚獣医に置き、今日退院。右の目の上、腰、後肢等の擦り傷の方が傷々しい。

その後すぐに、体温も平温となり、食欲も旺盛で一安心。毎日引き馬を行う、引つぱつても仲々動かさず、以前の元気はどこえやら、余計哀れである。

十月二十日 調馬索を行う三十分位。常歩は比較的良く歩く、速歩も少し行う。

十月二十三日 騎乗、常歩で野外一時間元気がないせいか、落着いている。しかし、馬場へ帰つて来たら、山透と立山が来ているのを見て頭を上げ向つて行く。この位元気があるのなら、と安心したが、騎手の意向を全く無視するのは弱つた。

十一月七日 久し振りに競馬場へ行く、競馬場の馬場開きで、他所の馬も沢山居るので心配だったが、意外と落着いている。走路を速歩で回る。調子が良いのにまかせて、少し走り過ぎたようだ。まだ充分注意しなければ………帰路、バス道路で車

とすれ違ふ度に興奮して走り出す。風が強かつた。

大分馴致がうまく行つていたと思つていたが、女子の強化練習で競馬場に通つていた時も、路面が凍りついて滑るせいもあつてか、興奮する。まだまだ道は遠い。毎日部班より離れ、競馬場内や通れるあらゆる所を歩き回る。

十一月二十一日 ポプラ並木で速歩、ようやく前へ出てくれるようになつて来た。部班についても遅れる事がなくなつた。しかしまだ山透、ジュビターを見ると頭を上げて向つて行く。勝手な事をさせないで脚を強力に使つて前に出す以外に手はないのだろう。

十一月二十七日 獣医の酒井先生の診断を受ける。もう傷口は心配なく、他の馬と同じ運動をやつて良いと言われ、とても嬉しかつた。午後久し振りの駆歩、懸念の右駆歩も割合楽に出る。

### ○ その後

相変わらず馴致に時間をかけ、そのせいか、もう殆ど構内なら安心だ。興奮もせず、むしろ馬場内での常歩よりも外へ出ると前に出ない。十二月は常歩、速歩がスムーズに前に出る事を目標とする。

十二月二日 電車通りに沿い、歩道を少し歩く。イチヨウ並木の真中頃に、スチーム管で路面の雪が溶けている所がありそこを数日続けて通る。鼻をならし、一步一步下を見て踏みしめて渡る。一方速歩はまだハミをきちんと受けず、頸が安定しない。

十二月十九日 岩坪さんに乗つていただく。脚の使い方がまだ足りない。なるべく蹄跡を離れて運動せよとの事。僕が不得手と思つていた右回転も別に何ともないと言われる。

この頃、ニンジンと声で停止、後退が重らずにやれるようになった。飛越は小さな障碍をやつても、遠くから踏切る。又どうしても左に寄つて行く。これを早く矯正せねばならない。

十二月二十六日 八木さんから左に寄つて行くのと、不得手の右駆歩のために、前肢施回、輪乗をやれとの指示あり。

### ○これからの事

一月十六日 中央ローンの周囲で速歩、駆歩、飛越を行う。飛越の際二度反抗された。これは全く失敗だった。絶対このような事のないよう。充分心せよ。

総合を目指して、あせらず、じつくりと、やつて行くつもりである。試合を目標として馬に無理をかける事のないよう、むしろ試合を無視する位でやらなければいけないと考えている。しかしノシビリする訳ではなく自分で一ヶ月毎に無理のない目標を立て、それをやり遂げ、積み重ねて行くつもりである。

馬場が積雪多く乗れないため、回転運動は余り出来ないだろうが、広い所を見つけては、行うようにし、又直線でもなるべく道路の右側を歩き左に寄る癖をなくすよう努めている。馴致と小障碍通過は今迄通り、絶対反抗、拒止をさせないようにする事。人間の未熟故に思うように進まないが、一生懸命やつて行くつもりである。

幸い手術後の経過も快調で、手術しても余り変りはないだろうと言われたのが、大分おとなしくなり、この点恵まれていると思う。

これからの故障させないよう充分注意しなければならない。最後に立つたが、これが最も大きな、又大切な目標である。

## 北翔号と共に

四年目 首藤 義明

チビの愛称で親しまれ、大事に大事に育てられた北翔号も、もはや今では新馬としての特権にいつまでも固執してはいられません。朝清、北揚、北環らと共に下級生の練習に使い、一方では試合で好成績を上げなければなりません。従つて責任者として、練習のやり方、運動の質、量などの配分に気をつかいます。

北翔号には下級生の時は殆んど乗る機会はありませんでしたが、一年程前、他の馬と随分違うなと感じたのが初まりで今迄乗ってきましたが、去年、不時の故障で五月の札幌自馬大後試合をあきらめました。その間、高橋兄の指導下で早く慣れねばと気持ばかりあせりましたが常歩運動のみの日が半年近くも続き、年が明けてやつと裂蹄の跡がなくなつたという次第です。そういうわけですので積雪期間中は肺心、筋力の回復に努めております。道路での騎乗が主となりますが、競技では、厳しい程の体力と速度を要求されますのでこの期間を有効に利用せねばと思えます。

入部以来見てきたチビは鎌田先輩の所で調教されて帰つてからは随分変わったように思います。もともと脚に敏感なこと、全能力で渾身の力で飛越すること、これはチビが純血種であることとの大きな特長でしたが、しかし、以前は障害前で止つた、

逃げたりが目についていました。つまり、騎手の命令に「服従」するということに欠けていたためだと思います。私が今、一番気を使っているのはこのことなのです。障害前では「絶対止めないぞ」、「逃さないぞ」とそればかり、当然のことですが緊張さすことを怠らないようにしております。

学内も昔とは相当変つてしまいましたが、なるべく野外に出して馴致の量をふやさねばと思います。蝶が飛んだ、木の葉が散つたでピクリするような敏感過ぎる性格まではともかく、場所により落ち着きを失つたり、馬場の状態をひどく気にしたりする性格などは幾分か緩和できるでしょうし、あわせて、歩度の変換、減却、半減却、旋回などの演習や、小さな障害を何度も飛越することは柔軟性を増し、障害を特別視しないようにするために必要なことだと思います。

総合馬として完成さすことは最初からの方針です。馬場は道内ではトップクラスにありますが、まだ完全ではありません。私の力不足は先輩の方々の助けをお借りして、人馬共々基本を正確にこなすことに錬磨致したいと思います。私達の目標でありますどこでも落ち着いて、又誰れでも（といつても程度はありますが）乗れるということに向つて努力しております。

それから、みんなよく練習して進んで北翔に乗つたらよいと思います。口でいわれなくてもなかなかよくわからないものです。例えば、腰を張れと云われますが、どうやればいいのか、張ればどんないいことがあるのか、など自分で考えながら実行して初めてわかります。北翔は基本がしつかりしていないと動いてくれません。ウチの馬のうちで最もよく教えてくれる馬です。

私もまだまだ未熟で馬以上に上達が早くなければなりません。

## 北 環 号

三年目 魚住 侑司

可成の以前からささやわれていました鹿馬の声も、今では外の馬に移つたようです。今日の所、球節部の疾患もほとんど練習には支障にはなつておりません。それでも春先迄は、一日一鞍が大部分でその一鞍も一週間使つては、一週間休ませるといった状態でした。毎日ブロー氏液等の薬品を使用し、その日その日をやつと持ちこたえていたものでした。この様な状態でしたので、鹿馬の第一候補にされたのも当然であります。しかし彼女もこれを知つてか知らぬか、次第に正常になつてきて秋口からは軽度の練習ながら一鞍の練習が継続して可能となり、今日では他緊養馬と同様に、二鞍の練習に使用し部内に於ては貴重な練習用馬の位置を占めて居ります。しかし球節が完全に治癒した訳ではありませんし、内臓特に消化器系が弱いので毎日毎日、健康状態に注意しながら運動を行なうのがこの馬の場合の調教であります。従順な氣質、柔軟な口向き、豊かな馬格などから前述の疾患が無ければ更に良き調教者に恵まれれば、かなりの戦績を望めますが果せぬかな遠距離輸送の困難な事等により参加試合も近慮に限られています。しかしながら馬場、障碍用の練習馬としては最良と思われれますので下級生指導などがその練習の中心となつております。

イタリアンスナック

サビニ

スパゲッテ  
ミートソース  
ナポリタン  
マカロニグラタン  
ホットドック  
サラダ各種  
ワイン  
スープ  
フルーツ  
Speciad  
チキンドバスケット

Coffee

アピア

割引券発行しております

¥ 60

珈琲の店 北17条電停前

将来、華やかな晴れの舞台は踏み得ない事とは思いますが、  
裏方としての存在価値はひとかならざるものがあると目負  
しています。  
(了)

食堂

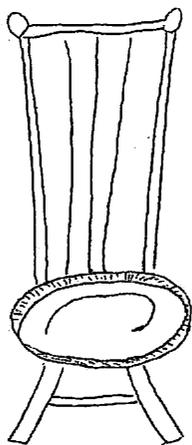
ひ ふ み

幸せいっぱい 腹いっぱい

お焼・お食事・お酒を扱っております

北17条西5丁目

Music & Coffee



トリコロール

さつほろ 北8西4 (北大正門前)

TEL (71) 9219

清酒 金富士直営

てつぽ

さつほろ 北17・西5 71-8776

# 会 計 報 告

4 年 目 黒 沢 道 雄

3 年 目 首 藤 義 明

2 年 目 池 田 統 洋

月	計	収 入		支 出	
		摘 要	金 額	摘 要	金 額
1		先月より繰越	3,188	装 蹄 葉 品 備 品	1,200 490 1,034
	小計		3,188		2,724
2		部 費	3,000	装 蹄 馬 具 備 品 通 信 費	5,570 350 3,938 810
	小計		3,000		10,668
3		部 費	5,000	装 蹄 費 品 雑費(追コン赤字他)	3,500 2,215 1,3290
	小計		5,000		1,9005
4		部 費 入 部 金 新 入 生 講 習 会 ダ ン パ ー 収 入 雑収入(コンパ黒字他)	10,650 4,500 2,5000 50,521 6,150	装 蹄 馬 具 連 盟 費 備 品 通 信 費 葉 品 雑 費 (馬調教の指針、印刷 代、講習会補助費)	2,600 3,000 7,000 7,702 2,300 165 3,7084
	小計		96,821		59,851

月	計	収 入		収 出	
		摘 要	金 額	摘 要	金 額
5		部 費	2,700	備 品	4,100
		入 部 金	3,500	装 蹄	4,500
		競馬場アルバイト	122,360	連 盟 費	500
		体 育 会 よ り	18,800	薬 品	260
				雑 費	790
	小計		147,360		10,150
6		部 費	17,200	遠征費 ( 関東北及 女子戦 )	24,400
		入 部 金	1,000	装 蹄	16,300
		雑 収 入	72,953	備 品	8,270
		(体育会より借金他)		雑費 (部内競技会他)	38,679
	小計		91,153		87,649
7		部 費	900	備 品	1,310
				雑 費	25,900
	小計		900		27,210
8		部 費	300	遠征費 (主決予七蹄)	7,9814
		バ イ ト	40,500	備 品	2,477
		雑 収 入	4,800	道 大 費 用	3,800
				雑費 (北雪借金返済他)	34,295
	小計		45,600		120,386
9		部 費	29,150	備 品	2,640
		バ イ ト	69,280	馬 具	560
		雑 収	8,620	薬 品	380
				返 信 費	1,920
				雑費 ( 社台への 交返済他 )	11,960
	小計		107,050		17,460

月 計	収 入		収 出	
	摘 要	金 額	摘 要	金 額
10	部 費	10,550	備 品	2,195
	バ イ ト	64,020	装 蹄	15,000
	雑 収 入	5,500	遠征費 (自馬大北日 本、国体)	126,140
			薬 品	720
			通 信 費	3,455
			雑 費	6,800
	小計	80,070		154,310
11	部 費	12,750	備 品	2,125
	雑 収 入		装 蹄	18,000
	(学馬連、電返、HBC)	38,000	遠征費 (学生選手権)	2,554
			雑 費 (体育会 の支払他)	56,500
			通 信 費	1,705
	小計	50,750		80,884
12	部 費	9,000	費 品	5,570
	雑 収 入		遠征費 (北日本女子)	11,000
	(北日本学馬連より及 未納金納入分)	17,840	装 蹄	15,000
			薬 品	6,306
			雑 費	2,580
	小計	26,840		40,456
総 計		657,732		630,753
	残 高	26,979		

昭和40年1月から12月までの会計を別表の通り報告します。

今年も例年通り苦しい会計になっておりますが、今年は特に競馬場のアルバイト回数をふやした関係で、収入面でアルバイトによる収入三四六、六八一円が十分に金収入の半分以上になつてしまいました。その他、電通、HBCなどの不定期の収入と、部費、学馬連などからの収入が入っております。部費も三〇〇円に値上げ致しました。サークル活動は誰もが経済的な苦痛なくして自由に参加できるのが建前で、今後部費を大巾にアップすることは問題があります。授業をサボつてアルバイトにしている状態で、ちなみにバイト料を個人負担したことにしてみますと部費月一、〇〇〇円近く収めていることになりました。従つて学校よりの援助が思うにまかせず、後援会へもあまり迷惑をおかけしないように、各自が馬術部を馬に乗るだけではなく、サークル活動の意味を広げて、深く考えてみる必要があります。又今年には新馬購入費がなく、松本さんより乾草の御援助があり、報道関係の思わぬ収入のあつた、いわば特異な年で、こんな状態ですのて来年はさらに苦しくなると思われまます。支出面では遠征費二四三、九〇八円が目立ちますが、自馬の大会が多くなつているため、この位が最低限度だと思えます。表で雑費の主な内容は( )で記してあります。

今年にはマネージャーの活躍で会計はたゞ金の収支のみでいい状態でしたが、反面、会計はその内容にうとく不都合なことがあります。次期より会計をマネージャー部の中に含み機構の改善をはかりました。なお、後援会収支は別に報告があるものと思ひます。

## マネーシングより

三年目 田中 俣

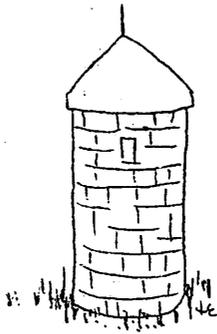
こゝ数年来の懸案である農場との関係、即ち学生部移管問題、これを是が非でも今年度中に解決してしまいたかつた。残念ながら今だにその決着をみずにいる。が今まで掴みどころがなかつたのに比べ次第に具体性を帯びてきている。五月、農場より「馬術部用の金として学校から来ている分以外は一切、農場からは出さない」と申し渡された。これには少なからずギョツとさせられた。というのは今まで飼料代、装蹄代(一〇〇万近い)は全て農場に依存してきているし、学校から農場に來ている馬術部用の金というのは、せいぜい六十万程度である。その差は余りにも大きい。毎年農場との交渉で精力消耗しているマネージャーにとつて、この訳のわからない化物の如き農場と縁を切りたいのはやまやまなのであるが、部で一方的に出てゆきますと言つたところで、今すぐ部を管理してくれるところはない。行くとなれば学生部なのだが、学生部とは金の面で、又繋養頭数の面ではなかなか折り合いがつかない。ともあれ、非常に無念ではあるが、来年も又農場に残りそうな形勢である。現在、飼料代は半沢先生のお力により徐々にはあるが、農場に払つてもらつてきている。装蹄代の方は、装蹄屋が現金でなければと事故、一応部で立替るといふ形になつてゐる。

前年度より持越された十万の借金と、その上、この装蹄代立

替のため、部の財政は窮乏と困惑との頂点に達し、例年、春または秋に一回行つていた競馬場のアルバイトを今年は春、夏、秋と三回行い、冬のダンスパーティーを加えれば、アルバイト料は実に四十五万にもなつた。一人一万の割である。学校を休むことを強制する競馬場のアルバイトを皆、文句も言わず……少し出たかな。とにかく一生懸命やつてくれた。部員諸兄姉、御苦労様でした。アルバイトはせいぜい三十万が限度だろう。

四月より部費を二五〇円から三〇〇円に値上げした。五〇円の値上げではさしたる額にはならないが、年に備品薬品関係が増大し、かつ以後自馬の試合が増えようとしている故遠征費も増すであろうから、これは将来五〇〇円にするための一ステップと考えている。

去年結成された後援会は今年も着実に発展してきている。現部員も協力を惜しまず、増々発展、充実したものにしなければならぬ。北大馬術部といえは「ポロ厩舎、ポロ部室」で有名な様である。よくよく周囲を見渡せば、成程あちこち継ぎはぎだらけ。部室、厩舎の新築、移転をも、本腰を入れて考えなければならぬ。



## 作 業

三年目 魚住 侑 司

扱っている仕事を述べますと、経済的な面では春、夏、秋と三回の競馬場のアルバイトを行ないました。部員各自延べ十回前後でダンスパーティーの会場使用禁止、映画フィルムの貸出し禁止等により興行収入の望み得ない今日、部財政逼迫の折柄唯一の重要な収入源であります。しかしこれも学生という点から問題も無きにもあらずですが、今年は何事もなく終ることが出来ました。が、これと代わる収入源が有りましたならば避け得たいものです。これも今後に残された課題の一つでありますしよう。

他の一つの仕事としては馬体管理上の作業であります。例年夏に行なわれております馬房床直し云々ゆるぎ、エンヤラー、貨車積み、除雪、etcと馬が居る限り不可欠の仕事でありまして、又これらが部生活の半分を占めると云つても過言ではありません。これらを怠る事に依つて練習に支障を来たすことは最小限避けるべきであります。これは馬術部のイロハとして過去も今後も部員に最初にたたき込まれることです。

これらの数多くの作業を近年流行の合理化というものでスムーズに行なおうとして二年目になりましたが指示されて動くという惧れは避けられないようです。ついつい事務的に流れてしまふことからも思います。が……。

## 飼育より

二年目 五十嵐 章

今年は一方では松本牧場から乾草をトラツクに三台近く載いた事とか、金銭的に飼料店の方が少々楽であつた事などがありました。農場からはコインがお涙程度しかもらえなかつた状態でした。作付けにも依るかと思ひますが、農場から入つてくるものが次第に少なくなつてゐる事は事実の様です。従つて最近では飼料を欠くという事はありませが、儉約がモットーとされ、より有効に使う為、燕麦挽き、乾草カッターは欠かさず行い飼料は試みながら記録をとつておられます。青草刈りも雪が薄らと積る迄続けた次第です。しかし馬体管理の上からは寝蓐は適度に厚く、草架は常に乾草で満ちてゐるのが最良かと思われまます。

蹄鉄は今年度から大きく変りました。以前迄は桑園の梶川蹄鉄屋に出掛けて行つたのですが、そこが多忙と云う事で廃業になつた為、農場本部近くの四本柱を補強した田装蹄師という方に出張してもらひ鉄を見てもらつてゐます。私達としては便利になりましたが、その支払いは全て部員負担の為あちら立てればこちら立たずと全く儘成らぬものです。

最後に私の扱いとして薬品関係がありますが、これは多分に人為的なものがありますので常に注意を怠らなければ最小限度に食い止められるものと思ひます。一年生にも協力を得て馬体

の障害だけは拒否、逃避は勿論馬には反抗してもらひたいものです。

## 馬具より

一年目 春田 恭彦

最近少しではあるが馬具に対する注意が高まつてきたのは喜ばしい限りである。我々はそのような細かい注意なくしては大きな発展は望めないのではなからうか。

練習を終えて部屋に吸い込まれる時、クラ館の閉る時間がせまつてゐる時、ついつい粗雑に扱われがちなのが馬具であるが、こんな時我々は沈着且つ冷静にそれを所定の場所に汚れを落として戻すべきである。肢巻きの場合には、もしうまそうなものが付着していればネズ公が加ふるし、ドロコンのまゝなら次に使う時に必らず困ることでしょう。

肢巻き及びバラユル(オワン)は今まで各人の長靴棚に放り込まれていたようですが、これからは必らず鞍箱の中に返しておくようにしてもらひたいものである。

現状では各馬に対する馬具が必らずしも合つてゐるとは言えません。「各馬に各馬の馬具」を方針としてやつてゆきたいと考えてゐます。現在のところ、引綱は各馬二本づつそろひ、水刺の手綱は綱手綱に交換しつづつあります。

最後に馬具手入れについて一言。

鞍及び刺(皮革製品一般)は冬期間は二週間に一度、夏期は

一ヶ月に一度以上行う。しかしあまり油をつけすぎるとかえつて弱くなるから注意。

次に油について

○ 液体オイル……皮革の中までしみ透り、柔らかにし、弾力性を保持させる（ヒビ割れ防止）。故に手綱、腹帯タツカク等に使用するとうまい。

○ 固体オイル……第一に防水である。皮革の表面を被つてそれを保存する。鞍及び腹帯に塗る。

尚、冬期間はヒビ割れするおそれがあるので頻繁に手入れをしなければならぬ。

## 後援会事務局報告

O B 三 浦 清一郎

北大のキャンパスにもようやく春の息吹きが感じられるこの頃でございます。

北大馬術部後援会結成（一九六四年十二月）以来すでに一年有余が過ぎました。この間有志各位、先賢諸氏の絶大なる御支援を賜りまして、当初の活動目標をほぼ達成することができました。紙上を借りまして厚く感謝の意を表する次第でございます。今後ともこの御援会を要として現役の諸君及び会員相互の連絡を密にして、北大馬術部のより一層の発展をめざさんとするものであります。よろしく御協力の程お願い申し上げます。

## ○ 活動経過

- 一、一九六四年十一月 十二名の発起人提案で趣意書発送
- 二、一九六四年十二月十七日 札幌石田屋にて後援会発会式
- 三、一九六五年三月十五日 後援会々報第一号発行
- 四、一九六五年六月一日 後援会費納入依頼書発行
- 五、一九六五年六月五日 会報第二号発行
- 六、一九六五年十月 会報第三号発行

第十二回目の会費納入依頼書発送

- 七、一九六五年十月 北大馬術部後援会名簿作成
- ## ○ 会費納入状況

後援会発足当初の目標は10万円でありましたが、昭41年3月現在で総額九万八千五百円の援助を戴いております。

二十七名の郵送分につきましては特に注意して、領収書を発送した積りでございますが、事務局に何か手落ちがございましたら、御一報下されたくお願い申し上げます。

記

- 一、小樽貯金局への直接郵送分……三万二千五百円
  - 二、事務局への直接納入分……二万六千円
  - 三、東京OB会抜い分（小山毅氏の報告による。）……四万円
- 総計……九万八千五百円

## ○ 後援会名簿について

昨年十月 昭和40年度の後援会名簿を作成し、お届け致しましたが、いろいろと不備もございまして御迷惑をおかけ致しました。

その後事務局へいただきましたお便りを参照し、更に正確を

記したものが、この部報の巻末の住所録でございます。しかしながら現在なお転居先不明にて郵便物が返送された方々が10名程あり、現役の諸君に依頼して調査致しております。つきましては何かお気付きの点がございましたら、お手数ながら、馬術部内後援会事務局まで御一報下さいますようお願い申し上げます。

以上まことに簡単なながら、後援会の活動を御報告申し上げます。

一九六六年三月

道内唯一の専門店

バッチ・メダル・徽章・カッター楯

株式会社

# 札幌メタル商会

札幌市南4西3

(スズキノ停留所前)

TEL

(23) 11209  
 (24) 10334  
 (25) 18711

パ				ン				の				店			
銀座屋								GINZA - ZAYA							
BAKERY															
Sapporo				さつぼろ				南1西17				TEL 6210701			

二年目 阿部 勝彦

馬あつての馬術部であり、馬術部あつての彼等である。彼等がいるからこそ我々は馬術部員である。両者を離して考えるのはナンセンスである。その意味で彼等と我々とは一体であるとも言える。一体にも程度はある。馬なくして俺はないという強烈な一体がある。馬にも乗つて勉強もして、どちらかといえば馬は楽しむ程度にという一体もある。そうかと思えば、馬なんぞに乗つて何が得られるのだという哲学的な一体もある。その程度はさまざまであるが、ともかく馬達と一体の関係にある我々にとつて、あるいは一体の関係にあつた人々にとつて、馬達が多少なりとも我々の生活を、あるいは心の中を支配しているには違いなからう。例えそれが、シヨボクレムードに陥いつて部屋に御無沙汰している者であつても、すつかり部と縁を切つた者であつても、時々ふと、寢床の中で、映画館の中で、そして部屋でくゆらす煙の中で、あるいは喫茶店でするコーヒの湯気の中で、そして最後に便所の中で、きつと彼等の事を思い浮べる事があるに違いない。

標題は「自馬紹介」ではあるが、以下は私が、時に寢床で、時に便所で、ふと思ひ起した馬達に対する印象である。

一 朝 清 号 一

首あくまで太く、顔あくまでゴツく、足あくまで太く短かい。こういう類は人間にもいる。しかしいかに頑張つたところで清の比ではない。とにかく我々は先づその太さにゴツさに短かさに、驚嘆の声を発せざるを得ない。いつ頃から我部に住みついたかも、いつ生まれたかも判然とせぬ言わば彼はヌシ的存在である。ヌシなる言葉は妖気を連想させる。そしてその妖気は、手入れの時に、前肢に後肢に不気味に漂う。時にはそれが爆発的パンチとなつて、前肢から後肢から強烈に発せられる。一般にヌシは愛嬌を連想させない。しかし清は愛嬌つきのヌシだから違大である。

清は満点馬である。たいていの障碍なら、巨体を揺さぶつてドサドサと飛ばす。しかしドラムにだけはこのドサドサが容易に出てこない。目を三角にしてイヤイヤをする。この三角が曲者である。乗手は何とか丸くしようとやつきとならねばならぬ。清はまた実直な馬である。毎日毎日モクモクと馬場に出かける。こういった清に、我々は何とも言えぬ愛着を感じる。清は我部のヌシであり、そして末長く思い出に残る我々の心のヌシでもある。

一 北 涼 号 一

「グレースは美人です」と、ある人が言つた。「ウソツケ」と、みんなが言つた。「でもやつぱり美人です」と、その人は繰り返した。「そんなものかなあ」と、みんなは改めて彼女を

見つめた。美しい栗毛である。優しい眼差しである。そしてみんなが言った。「そう言われりや確かにそうだ」自分の美人たる事を容易に人に明きらかにしないところなんざあ愚かな我々にはちと真似のできないところだ。彼女は間もなく十四才である。人間の年令に換算すりや五十の坂はとうに越している事になる。美人薄命なる人間界の古くからの観念をあつさり否定してしまつた。たいした美人である。

馬は何頭か集まると必ずそこに、中心となるべきボスが生まれると聞いた。年令からいつても、容姿からいつても、グレースはきつとボスに違いない。しかし人間には滅法おとなしい。これで馬場でのカツカが直りさえすれば、美人の上は、偉大の称号を冠するの価値はある。

昨年の六月、彼女は可愛い女の児を生んだ。デコと名付けて大層可愛いがつていたのだが、我部をとりまく種々の状況は、分かつてからざる親子の愛情にさえも非情であつた。十一月に別離の悲哀を痛切に味わつた彼女は、いまやその心の痛みを忘れたのか、それとも忘れようとしているのか、無心に草を食んでいる。

## 一 北 飄 号 一

たゆまぬ調教が着々と突つて、彼女はいまやエースの飄である。力感あふれるその飛越で数々の試合に活躍してきたのだが、昨年の学生目馬大には、出発前北環に蹴られ、全身総傷となつて出場した。悲壯なまでの痛々しさではあつたが、それでも我々の期待をしようつての出場は、いかにエースと呼ばれる者に課

せられた宿命とはいえ、いささか気の毒の感に耐えなかつたものだ。失権したとはいえ、我々はその健斗を心から讀みたい。彼女は人なつつくく、そして美しい青毛の馬である。近所の子供等が言う、「あの馬、一番偉いから一頭だけ黒いの？」その素朴な質問に返す言葉を知らず、私はただ笑つてうなづく。部班運動を見て子供等がまた言う、「あの馬、一番偉いから先頭を走らんだね」私はまた笑つてうなづくより外に方法を知らなかつた。馬の事など何も知らない子供達にも、彼女の素晴しさだけは直観的に分かつたのかも知れない。それが一頭だけ黒いという事と、先頭を走ると言う二つの条件によつて、彼等をして彼女のことを「偉いから」と言わしめたのだらうと私は思つた。

彼女は我部のエースである。今年も来年も再来年も頑張つてもらいたい。そうすりや我部はいつかはエースだらけになる。こんな愉快な話つて他にあるだらうか。

## 一 北 環 号 一

馬も年をとるにつれて角がとれてくるものかも知れない。彼女も最近では随分おとなしくなつた。以前は人に敵意を持ち、やたらと白眼をギロつかせたり歯をむき出したりしたもので、腕やら胸やら、ついでに尻やらに、ガブリとやられた跡をお持ちの御仁も少くはないと思う。しかし彼女はなかなかのセクシー美人だから、案外白眼のギロつきは色目のつもりであつたかも知れないし、キツスのつもりのガブリであつたかも知れない。そうだとすりやすさまじい色目があつたものだ。かくも猛烈な

キツスがあつたものよ。

優秀な能力を持ちながら運に恵まれなかつたり、あるいは病氣や怪俄などでそれを充分に發揮できない人がいる。北揚はまさにそれである。ちよつとした障礙ならいとも簡単に満点でゴールする能力を持つているし、乗心地も最高だと惚れ込む人間もいるのだが、いかんせん惜しいことに内臓が弱い、故障が多い。それ故スタミナもない。従つて中央での大きな試合は無理という事になる。ああ、あたら才能を、と我々は慨嘆するばかりである。

美人は丈夫で長持ちしてほしい。セクシー美人ならなおのこと健康的であつてもらわなくては困る。怪俄の大半は人間のせいである。我々の不注意による。それ故に我々は責任を感じずにはいられぬし、彼女に対してすまないのである。

## ―北揚号―

純日本的な女性の特徴が、なよなよにあるとするならば、北揚は最も女性的な馬である。なんとも頼りない感がする。吹けば飛ぶよな、である。ある男が冬休みの猛吹雪に北揚に乗ろうか乗るまいかと迷つていた事があつた。結局は乗らなかつたのだが後で訳を聞いてみると、どうも吹き飛ばされそうな気がしたとの事であつた。これはきつと冗談ではなく実感が言わせた言葉だろうと思う。

この純日本女性性を人を替める事を心得ている。乗手がいささかでもガタガタしているとさつそく替めだす。替めるのは人ばかりではない。手でも足でも顔でも手袋でも帽子でも手当り次

第いや舌当り次第替め尽す。替めりの第一人者だ。跳ねる事も心得ている。落馬生産量随一を誇つて他に譲らない。はなはだ迷惑な誇りである。以上の如く評判はあまりバツとしないが、可愛い事には変わりはない。オドオドと臆病なところがあるだけに、一層我々はいたわつてやらなければならぬのだと思う。

## ―北晨号―

彼女が入厩した当時、我々はそのピリリと引き締つた肉と、スラリと伸び切つたスマートな足に目を見張つた。いかにも颯爽たるの感があつた。ところが馬は元来ポーズを作る事を知らないから、どこまでも颯爽で押し通そうとはしない。どこか間の抜けた、あるいは子供じみた無邪気な一面を隠そうなどという気は毛頭ないのである。とういつた正直さがあるからこそ我々は馬を見て、可愛い奴よと思うのかも知れぬ。北晨もまた然りである。颯爽とはしていても、とてもいたずらつ子である。馬栓棒をガリガリやつてみたり、壁を蹴つとばしてみたり、人が通ると噛んでみたり、馬房の中で跳びはねてみたり、ギリギリ歯ぎしりしてみたり、いやはや忙しいのだ。

彼女の走りつぶり、飛えつぶりは雄大である。まさに北海道の雄、日本の雄となるに相応しい馬である。昨年は団体複合に出場して奮戦した。今年はもつと数多くの試合で必ずや健闘するに違いない。

## ―北驛号(旧名ジユピター)―

サラブレットと聞くと我々はシンザンなどの颯爽とした姿を

連想する。新参には違ひはないが、どうも調子がおかしい。へんだへんだと思つていたらやつぱりへんだつた。後肢がやたらと弱いのである。前肢を上げようものならすぐへなへなとなる。へなへなのついでに後肢で後肢を踏んづけてしまう。それ故なかなか前肢を上げてくれない。困るのは手入れする人間である。それでも近頃はかなり容易に上げてくれるようになったのは嬉しい限りである。

乗心地もどうも妙だ。「妙だ」は失礼である。「不思議だ」そう、まさしく不思議な心地である。フワリフワリと雲の上を歩いていようなものだ。よくよく考えてみると、彼は神の中の神ジュビターでおわした。この神様が雲上にましましたか否かはよく知らぬが、きつとましましたに違ひあるまい。そうでなくちや事の辻つまが合わない。

彼は優秀な馬場馬だそうである。未熟で練習不足、そのうえまだよく彼を知らない私には、「だそうである」としか言えない。しかしあのフワリフワリとした妙なる乗心地から、その素晴らしさの一端がうかがえるような気がする。雪が融けて馬場の周囲で青草が頭をもたげる頃、彼はきつと美事な馬場を展開してくれる事だろう。

## 一 北 彗 号一

我部きつての気かん坊で当番泣かせは北彗である。ところが昨年十月の去勢手術後しばらくの間はさすがにシヨンポリとしれまでしばしば泣かされてきた当番連中が今度はそのあまりの痛々しさに同情の涙を流す事になつた。「お前らしくもない、

早く元氣になれよな、おい」やがて北彗は美事に当番の期待に応えて再び元氣発刺と暴れ出した。そして当番は三度泣き始めた。涙なしでは語れないのが北彗である。おまけにこの気かん坊、涙の出る程可愛い御面相をしている。クリクリツとした眼には小じわ一つ見られず、ツヤツヤとしたその毛並みもまた素晴らしい。若い、という事の素晴しさを惜しげもなく見せてくれる。そしてこの若い体内には測り知れぬ可能性が宿つている。我々は秘かにそう思つて期待する。過大の期待は重荷となる。我々は静かに彼の成長を見守つてやらねばならない。

## 一 北 翔 号一

我部唯一の純血アラブは、さすがに他の連中とは様子が違ふ。その小さな体は、始めて見る者をして彼女を「可愛い子馬ちゃん」と錯覚せしめる。我々をして彼女を「チビ」と呼ばしめる。チビでももう十一才である。馬鹿におしでないよ。容姿あくまで端麗である。恐れ入りました。

そのデリケートな性質は、ヒラヒラと舞い下りる木の葉にピクリとする。腹を空かしてブーと鳴くブタにまたピクリとする。乗つてる人間はそのたびにギクリとする。

アラブは改良の元租である。彼女にもその誇りがある。従つてやたらと自分の部屋を汚す事はない。一日たつても寝ワラはやつぱり寝ワラでいる。寝ワラ変じてポロにはなかなかならない。当番は素知らぬ顔で、それを他の馬房に移し、彼女にはフカフカした新しい寝ワラを与える。知らぬが仏は他の連中である。御仏達は使い古しの上でお休みにならねばならぬ。

彼女はなかなか顔に手を触れさせてくれない。純血の誇りは気位の高さとなつて現われるものかと、我々はひがみ混じりにそう思う。それでも腹を空かしてキユーイと鳴くのは御愛嬌だ。裂蹄の為に彼女は昨年一年間をフイにした。怪俄がいかに恐ろしいものであるかを我々は改めて知つた。故障さえなければ活躍できる馬だけに一層その感が強かつた。我々は何よりも先づ馬の故障に注意せねばならぬ。それなくして名馬は生まれないうし従つて部の発展も望めないのだと思う。

## 「北驪号」命名について

五年目 近藤 喜十郎

「ある由緒ある大名が自分の購入した馬に「三味線」という名を付ける。これを知つた家老「殿、古来、勇将の乗りました名馬はイケズギ、スルスミなどの名を付けました、いかようにして、三味線などとお付けになつたので、ございますか」と問えば、殿「お前達が乗ればバチがあたる。」」

という古典落語があるが、新馬が入つてくると部員の楽しみなのが名付けである。皆それぞれに少ない知恵をしぼり、辞書をひっくり返し、はては察歌集から新聞まで、何かいい字はないかとさがすのが通例である。そしていつも出されるのが「竜」「麗」「斗」「星」「雄」「大」など大体十五から二十ぐらいであるか。現在愛馬達の名を見てみるとどれひとつとつても先賢は実によく考へたものだと思ふものばかりである。

たとえば「翔」は天を駆ける様に飛越するし、「涼」の眼、色つやは見る物にすずしきを与え、「飄」の駆足は黒きつむじ風である。「名は体を表わす。」と古人は諺に残しているが馬にもやはりその馬の持つている特徴を表わした名を付けてやりた

い。  
ジュピター号は純サラブレッドで、背は雲をつく様に高く、その色はタテガミ、尾は墨を流した様に黒く、体は五月の北海道の土の色の様にあざやかな黒茶色である。調教は日本一流で正に北大にとつてはもつたないぐらいの名馬である。

幸い私が出した名が付けられたので、ここでその名の由来をお知らせしておきたい。史記を読んでいる時に次なる文が目に入つた。「周の穆王が八頭の駿馬を持つていて、その中でもさらにいい三頭がいてその中に鹿毛の馬で「驪（かりゆう）」という馬がいた。「驪」という字を調べてみると、「卯（りゆう）なる字は本来は赤茶の色の意味で、「驪」とは「赤馬にて黒きタテガミと尾を有する」（即ち鹿毛）としるしてある。又莊子の秋水篇に「驪、一日ニ千里ヲ馳ケル。」とあり、「驪」の字は馬にとつては気名譽な字といえよう。

中国はしばしば遊放民族が支配したり、又彼達の影響を受けている為か古来から馬廐の字、馬に關する言葉は非常に多い。上田万年博士の大辞典には馬廐の字が一九二字ものつていて、表意文字は実に便利なもので一字で馬の色、性格、状態、雌雄などを表わしてしまふ。中国は馬なるものが戦闘において最大兵器となつた為、非常に重要視され、大切にされたので馬に關する言葉や字が多いのではないかと思われる。しかるに我が

困に於ては「馬脚をあらわす。」「馬の耳に念仏」「生き馬の目を抜く」等々あまりいい表現に馬というものが使われないのは残念である。だからせめて実質にはうんとかわいがつてやり、大切にしたいものだ。

大小宴会承ります

北都壽司

出前迅速

TEL 24-5570  
札幌市南3西5

## 庄内歯科

院長 庄内貞夫

札幌市白石中央五三一三  
TEL 06-25504

一般医薬品

## ホシ伊藤(株)

本社 札幌市北一西三

(時計台前)

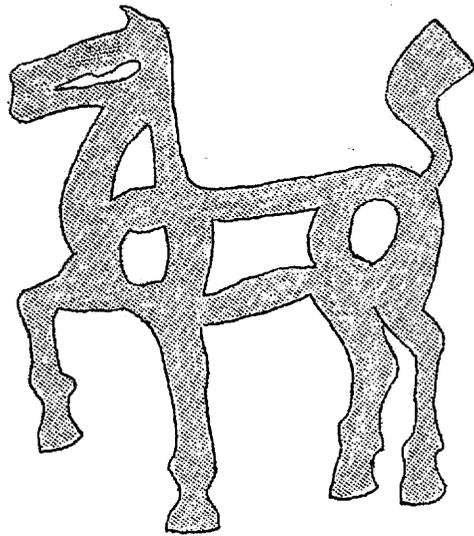
TEL 041216(代)

支店 札幌・帯広・釧路・北見・函館

## 太田蹄鉄店

札幌市菊水北12  
電 01-0851

随 想



## 「思うこと」

四年目 八木 多賀子

人間は何かにと理窟を言いたがるものである。「三太郎の日記」にはこうあるとのこと。「書けることはよいことである。しかし、書けない事必ずしも悪いことではない。書けない時に書くよりも一本当に書かずにいられない事がないのに書き散らすよりも、書かない方がよい事である。」といったからといって、私が今、書かずにいられない心境にあるわけでもない。ちよつとニュアンスの異なる「書かねばならない状態」にあるためである。「もつと素直になつた方がいいぞ」という声の後から聞えてきそうである。

馬術部における四年間の生活も、今や間もなく終らんとしている。気持の上では学部生活よりもずつと大きな比重を占めてきただけに、出ていくとなるととても寂しい。何かにと不満はあつてもやはりいい所なのである。

この四年間を過してきた私にとつて、今何が残つているのだろうか。ある友への手紙の一部。

「このお正月は二週間、ぼんやりと何も考えずに暮しました。『考えずに』というよりは『考えないよう』といった方がいいでしょう。去年の秋から自分自身でどうしようもない空虚な穴の中に落ち込んでしまつて、いまだに抜け出せずにおります。ばかげているとは知りつつ、何のために生きているのか、そし

て生きなければならぬのか、などと答の得られない難問をもて遊んでいます。そして一人で悲壯感に浸つています。一種のポーズかもしれません。

しばらく部から離れていたせいか、自分自身おそろしいくらい、部に対して何の感情もわいてきません。しばらく、いつても一ヶ月半位です。半月ばかりたつた時もうそでしたから、必ずしも客観的な時間の長短が原因でないでしょう。部報の原稿も書かなければならないのですが、観念論的、虚無的になつている私には、とても他の人々の目にふれて然るべきものは書けそうにもありません。でも書こうと努力はするのですけれど。

(一九六六、一二三)

この頃は、部から去つていく人の気持がよくわかるような気がした。部の生活の終りになつて、こんな気持になろうとは思ひもかけなかつた。私の馬術部に対する情熱がだんだん薄らいでいつたともいえるのかもしれない。純粹さが失われていつたのかもしれない。残された少い日を情熱の回復へと向けようと思う。なぜならこのまま去つてしまうことによつて、今までの四年間の生活がすべて無意味なものになりかねないから。

私は人間が好きである。しかしまた大嫌いでもある。人間は理性の動物である。だからといつてその行動はすべて合理的であるとはいえない。矛盾もまた多いと思う。こんなことを考える。友達とは何ていいものであろうと。それから友達なんて何にもなりやしない、何も知つちやいないんだ、とも。人間は決して一人では生きていられないものを、その本性としてもつているんだということ。そしてまた人間は常に孤独であるという

ことを。

親友とは何でも話し合せて、何でもお互いによくわかっているはずと考えがちである。けれども実際はそうではない。知らないからこそ親友たり得るのだと言える。何でも知っていたら「神様」である。

人間は孤独である。しかし孤独な存在であるから共同生活をしていけるのだとは云えない。「人間はもともと社会的動物であり、社会内でのみ自己を孤立化しうる動物なのである。社会外での孤立した個人などは、共に生きて共に話をする諸個人がなくて発する言語の発達にも等しい空想である」とはマルクスのことばであるが、確かにそうである。

在るものを否定することは無意味である。在るものはいかにしても在るのである。自分の存在を肯定し、他人の存在も肯定する。もつと建設的でなければと思う。わからないながらも、何かを求めて努力すべきである。

「君を活気づけているすべての苦難のうち、僕の知らないものは一つもない。それなのに、君は僕に恥じ入らせようと思つたのだね。精神とは何か。たわむれる憎悪だ。芸術とは何か。建設する憧憬だ。僕たち二人とも、欺かれた者、餓えた者、訴える者、否定する者の国を故郷としている。それにまた自蔑にみちた、自分を裏切るような気持の時をも、僕等二人は共有している。なぜなら、僕たちは人生に対する、のぞましい幸福に対する、屈辱的な愛で、我を失っているからだ。ところが、君にはほくがわからなかつたのだね。

迷語。迷語。——そしてこの遺憾の思いが、全く彼の心のみ

たした時その奥底のほうのどこかで、せつないと同時に快い一つの手感がきらめいた。——誤っているのはあの男一人だろうか。迷語の終りはどこにあるのだ。地上のすべてが、あこがれが、迷語なのではあるまいか。単純に衝動的に発刺たる人々、つまり、精神と芸術とによる浄化も、言語による解説も知らぬ啞の人生——に寄せている意志によつて造られた者たちは、残らず同胞なのだ。そのくせ、僕等はお互いにお互いがわからない。何かもつと別の愛が必要だ。何かもつと別のが。——それから家へ帰つて、書籍や絵画や、静かなまなざしの胸像などの間に腰をおろしている間、彼の心は、こういう優しい言葉に動かされていた。——「子供等よ、互いに愛せよ」

(トスス・マンの「短編より」)

終り

## 雑 感

四年目 黒 沢 道 雄

北海道は、小さな時から、私の未知のあこがれの地であつた。静岡という暖国で、生まれ育つたためでもあろうが、私の道雄、という名前のいわれにも、関連しているのであろうか。私の生まれる前、しばらくの間、両親は、函館に住んでいたという。函館を離れて、静岡に赴く時、母の胎内に私がおり、その時、男が生まれたなら、北海道の道をとつて、道雄、とつけようということになつたと聞かされていた。いわば北海

道は、私の第一の故郷(?)とさえいえないわけでもないのである。北大に入学してから、早や四年の月日が、たとうとしており、学生生活も振り返つてみる時が来た。日記をとりだしてみると、あんなこともあつたか、こんなことも考えていたのかと昨日の出来事のようによみがえつてくる。

未知のものを知り驚き、又いかに生きるべきかの方向が定まらず、心の中は動揺の連続で、自己嫌悪感に悩まされ、何かをつかもうともがき、悩み続けた一、二年目。

何が為せるわざか、馬術のほんとうのおもしろさを知り、北涼と共にした、そして私にとつて誠に貴重な喜び苦しみ(苦しみがすべてであつたと言えるだろう)の体験を得た忘れ得ぬ三年目。

試合に向つて、強化練習に、合宿に、苦しみ楽しみ、強く結びつき、試合に一喜一憂した、そしてさらに新しい生活に困惑し、それから脱皮して、いかに生きるべきかの方向、目標が定まりつつあるように感じられ、徐々にではあるが、確信と希望が得られつつあるさらに忘れられぬであろう四年目。この四年間は、私にとつて一生涯忘れ得ぬ青春の一ページである。

青春——青年の特権であろう。しかし、いつまでもいつまでも、青春でありたい。たとえ肉体が老いようと、心と行動は、常に若さを、保ち続けたいものである。

大学四年間において、馬術部の生活のしめる比重は、きわめて大きかつた。結局途中で止めずに最後まで続いたのは、やはり「おもしろかつた」からであろうか。スポーツのよさは、その純粋性と体全体で行動を示す躍動感であろう。そこには口先

だけの理論では、ごまかせない厳しさもあろう。ゴールに向つて我れを忘れて、一心に進むそのひたむきな眼差の真剣さもあろう。又部生活のよさは、その人間臭さであろうか。ある目標に向つて、全部員が、立場こそ違え、お互いを知り、学び、苦しみ、喜び分つ目に見えない連帯感——これこそ最高のものであらう。

連帯感——これと相反するものの不信感、これが入る込む余地のあるということは、何と悲しいことか。それも、本質的な対立を除いては、悪意から生ずることはまれであつて、お互いの理解不足、誤解で生ずることが、ほとんどなのである。これは「社会↓個人」としての個人をとらえず、「個人↓社会」としての個人をとらえることから生ずるもので、「個人」の真のあり方をとらえれば、消え去り得るものと思う。これと関連して、部生活のあり方であるが、いわゆる活動すること、いわゆる学生の本分を全うするということは、物理的に明きらかに矛盾することであるが、矛盾を克服してこそ眞の発展があるものと思う。「社会と個人」の問題と照らしあわせて考えてみると、一つの団体に参加するということは、その団体から個人は、当然のことながら「東縛」と相反し矛盾する「個人」の意志・自由の問題は、どうなるのであろうか。「東縛」を取り除こうとすれば、その団体の崩壊を意味し、又「東縛」を単に甘受すれば窒息してしまふであらう。これは、団体のもつ「東縛」を自分(個人)の求めているものと、一致させることによつて、「東縛」が「東縛」として感じられないようになるものと思われる。だから、部員ひとりひとりが、進んで活動

し、意見を出していき、それが皆んなのものとして反映されれば、きゆうくつなことも感じられなくなり、活動することが苦にならなくなるものと思う。つまり個人は主体性をもち、その団体は部員全体の意見を反映させ進むことである。そうすれば部の雰囲気も、活気を呈し、たて横特にたての間に不信感がなくなるものと思う。

最後の学生生活も、もはや秒読み段階になつてしまつた。

去ることは、悲しいことである。しかし、去ること、は又、迎えられ、ことである。迎えられることにより又生が吹きこまれ新たな喜びが得られよう。

しかし、これら私の歩む道は、平たんな完全に舗装のなされている道ばかりではなからう。いやむしろ、困難の多い、曲がりくねつた道もあれば、上から岩が落ちてこぬとも限らない山道もあろう。けれども、勇気をもつて、我が進むべき道を、固く結ばれつつ、着実に歩み続けたい。

ある偉大な思想家が言つた「ある程度自分で苦勞してみなければ、どんな重大な問題からも真理をみいだすことはできない」と。

うまくなろうとする者の心得

「下手くそ」もうまくなる!!

四年目 高橋昭夫

何回も何回も原稿を催促されてからやつと書き出し、書いて

からは、せつかく書いたんだし原稿提出は一番おそくなつてしまつた代りにみなさんからはまつさきに読んでもらおうと生意気なことを考えました。まつさきに読んでもらおうと人の目につくような題名を付けようと夜も寝ないで考えた末、この偉そうな題名にしました。選手になるものだけがうまくなろうとしていのではない、趣味として乗っている人でも、部屋に寄りつかないような人でも、どんな人でもうまくなりたいという気持をもつているものです。きつとこれを読んでおられる人は、目次を見て興味ある題名なのでだまされて読み始めたに違いない。内容はなんといいことはない、僕が練習中に練習について感じた個人的見解を書いただけで、これを誦んでうまくなるかどうかは知りません。参考にして下さい。

#### (一) 人間と馬との関係

人間に乘られていることが馬にとつて全然苦痛でないかのようには、馬は喜んで正確に歩んでいる。こういう状態に乗りこなす人を名人と呼ぶのだと思います。このように乗りこなす為には人間が鍛えられなければならない点は何かという、(1)馬のじやまをしないこと、(2)どんな場合でも(1)を維持しつつ確実な扶助操作をすることだと思ひます。勿論、(1)と(2)はどつちが先に上達すべきかというのではなく、馬に乗っている間(1)と(2)は切り離して分析して考えられるものではありません。

#### (二) どのようにすれば技術が身につくか

僕は、先輩諸兄や名人から色々聞き、それを参考にしながら実践し、自分でも考えながら実践して上達します。このとき、僕は名人の猿まねをしたのでは上達しないだろうということ

を言いたいのです。

名人と同じような扶助操作ができ、同じようなフォームで乗りこなすことができたならば、その人もその名人と同じくらいにうまくなったと言うことができますが、僕らが名人と同じくらいまくなろうとするとき、名人の猿まねをすればうまくなるでしょうか。うまくなりません。

例えば、フォーム一つをとつて考えてみれば、名人とフォームが同じときだいたいその人もうまくいことになりませんが、だからと言つて、フォームを一致させることが上達することなのではないのです。よく馬術は恰好ではないと言われることです。

また、一つの扶助を覚えるときについても同じことが言えます。名人がおしえてくれた、挙なり、脚なりの形をとればそれでよいというのではありません。名人がおしえてくれたフォームなり、扶助なりの形をやればそれでよいというのではなく、どうしてそういうフォームなり、扶助をするのかを研究しなければなりません。

おしえられたことだけをやるのではなく、自分で自主的に色々なことをやつてみて、その上になるほど名人のおしえてくれたことは最も効果的であつたというような自主的自覚から一つのフォームなり、扶助なりを覚えてゆかなければなりません。

### (三) 名人への道

初心者がはじめからうまくいわけではないことは当然のことですが、初心者がすぐに名人と同じような正しい乗り方で乗れるようになると思われません。例えば、初心者にあるフォームを強制し、そのフォームでの練習ばかりをやつたとしても、そ

の初心者がどれだけ能率よく上達するかは疑問です。

馬術をやるとは、先ず馬上に安定することが出発点であり、またいかなる場合でも馬上に安定することが最終目標であると言えらると思いますが、この根本と、この根本に基づいて発展させたフォームや扶助方法を切り離してしまふ本末転倒させることになつてはなりません。

初心者があるフォームをとつて乗ろうとして、フォームにだけ気をとられ、おまけに下からどなりちらしている上級生に氣をとられ、身体をコチコチにして乗つていたんでは上達しません。初心者は、馬に乗つたら先ず安定することが第一だし、おしえられたことを参考にしながらも自分で色々な姿勢をとつてみる、そして安定するような姿勢を自主的に自分で見つけ出さなければなりません。そのとき、最も安定する姿勢とは即ち、名人がおしえてくれた姿勢と一致し、その人は上達したことになるのですが、名人の恰好をただ猿まねするようなことでは能率よく上達しません。今、初心者に例をとりましたが、初心者でなくても、どういふ段階にある人でも上達のしかたはこのようなものだと思えます。このようなしかたで一つの目の課題を覚え、二つ目の課題を覚えて……。というふうにして上達してゆくものだと思えます。

名人と同じような正しい乗り方ができるようにするには、猿まねをしてすぐ会得できるものではなく、そこへ致るまでの段階を踏まなければならぬと思えます。だから僕らの毎日の練習は、名人の域にいきなり達する為ではなく、どうかして早くその段階を確実に踏んでゆく、勿論先人が失敗した無駄き

道へはあまり踏み出さないように先人の成果の上になつて一歩  
一歩確実に前進する為のものでなければなりません。

#### 四 能率よい練習方法

(一)、(二)に書いたような上達方法を可能にするには、やはり練習方法も考えなければなりません。

うまくなりたいと思う人が「自主的に練習に励むとき最も早く確実に上達する」のです。これが練習方法を考えるときの根本でなければなりません。下級生を上達させようとするととき、上級生のしごきの強制ハードトレーニングも効果あるでしょうが、当の下級生が少しでもやる気なかつたら思うような効果をあげられないでしょう。逆に、その下級生がうまくなるようにして自主的に練習に励むとき、その人はどんどん上達してゆくでしょう。

うまくなるうとして自主的に練習に励むということは、自然、練習を厳しいものにしても、これは自主的に自分を鍛えることです。そして、その練習はそれ自体非常に楽しいものです。どんなにつらくても、その練習が楽しくてしようがないというのは、それが自主的に行われ、その人が能率よく上達してゆくからです。誰からか強制されてやるというわけではなく、自分でうまくなりたいとして厳しく練習に励んだときは、練習は楽しいし、上達します。

上級生かだれかに、練習時間も練習方法もすべて強制されたり、あるいはこかれたり、あるいは勝たなければならぬというあせりのような悲壯的考え方の下での練習であるならば、たえずビクビクしたり、不安になつたり、いらいらしたりで決つし

て楽しいものではないでしょうし、能率よく上達もしません。

初めに書きましたように、うまくなりたいという気持は、選手になるうとする者には勿論、趣味的にやつている人にも、部屋に寄りつかないような人にも、誰にでもあるのです。そういう素朴な、うまくなりたいという気持から自主的に練習に励むとき最も早く確実に上達するのです。

問題は、どのようにしてうまくなりたいというみんなの中にある気持をひき出し、その人が実際にうまくなるからです。まず一人ひとりがかううまくなるうとして積極的に練習に参加し、練習方法についても考えてゆくことです。上級生も下級生もみんな練習方法を考え、部の運営に積極的に参加し、一人ひとりが主人公になつて活動することです。また、上級生は、部員一人ひとりから自主的積極性をひき出すように思いやり、配慮してゆかなければなりません。このときの、上級生の下級生に對する思いやり、配慮は絶対必要ですし、これは上級生の果さなければならぬ責任の一つでもあります。

ダラダラ長くなりましたが、(三)の結論を書きます。能率よい練習方法とはこれだというものではなく、みんながうまくなるう、能率よく練習しようとして、上級生も下級生もみんな集まつて考え出した練習方法こそ、その人達にとつて最も能率よい練習方法なのです。



## 黄色いべし

―すすきの案内―

W・K

札幌の冬は寒暖計が目盛のないところまで下がってしまうのだからやはり寒く、ストーブを真赤になるほど燃しても部屋のすき間から寒さがようしやなく入ってくる。するといきおい体の内部より根本的に暖ためることになる。

古来から「飲む」打つ、買う、という遊びをあらわす言葉があるが、馬術部員の場合は「乗る、飲む、ダべる、であらう。伝統としてよく飲める人、好きな人が多くあつまっている。これは女子部員もかわりなくなつて心強い次第だ。

試合が終わつて、その結果がどうであらうともそれまでいっしよに苦労してきた部員同志がなんとなく南に足を向ける。

まず集まるところが、三鈴。(南四西四)であらう。王座予選と七帝戦と女子戦の三つのタイトルを奪つた時、カウンタをぐるりと部員がとりかこみ、和服と角帽姿のYさんの音頭で優勝歌がすすきの空にひびきわたつたと云う。最近部員の足が遠のいていらく関東風のおでんと、昭和の春、がさびしがつているとか。新宿通りの山形も昔馬術部のたまり場であつたそうだ。今でも後援会のOさんは定連とか。おでんが主で山形県のコクのある酒が安くたのしく飲めるところだ。

そこから一本下がりに角に焼鳥の利休。(南六西四)がある。親父が山が何よりも好きで客に山の好きな人がいると話はず

ず、他の客のことはかまわずいろいろ面白い話をしてくれる。特に若鳥がうまく、本場のプロイラーを上まわる味、又焼鳥のタレが独特で一度喰べたら忘れられない。

すすきのフードセンターの南側に有名な？。こ合半。(南六西四)がある。ここに入つた時にはいつも席をさがすのが大変といわれる程いつも混んでいる。北海道にはめずらしい、江戸風の居酒屋作りで、とつくり、さかすきが凝つてあつて面白い。料理は何でも安くてうまいが特に、タコブツ、イカドン、は傑作。又鍋料理に特徴があつてうまい、石狩、浜、ちりなどそれそれ味が違つていて冬は体が暖たたまる。この店は最近部員がよく飲みに行くとか、又若い札幌の方々もなじみらしい。

北海道の味が楽しめる店は多くあるが、雰囲気もすべて北の国という感じのところは少ない。まず、えぞ御殿。(狸小路六丁目)であらう、玄関がいかめしく何か入りにくい感じを与え、るが中は北海道の気分満点。ジャガイモのホカホカしたのにたつぷりバターをつけてビールを飲みかわすというのはまず内地では味わえない、内部が山小屋、練番屋、焼肉ホールなどと分けてありとも気分満点で値段でござである。

二人あるいは数人で静かに人生を、恋を、馬を語る場所としては、うたり。(南三西四)が格好だ。せまい急な階段を登るとブーンと焼き物のおいがする。部屋の真中に大きな炉が切つてあり薄暗いあんどんがやわらかい光を投げている。ムードとしては最高であらう。この支店が南五西五にもある。こちらも大体同じ作りで少しこじんまりしている。

もう少し高級なところと思つたらスケートセンター西となり

の。おれんち。がいい。座敷、小あがり、カウンターとあるがどこでも値段は同じ、メニューは材料だけで調理法と予算を云えばその範囲内で作ってくれる。特に道産子焼、おれんち焼が評判がいい。

さてスキノにはバーが一〇〇軒以上あり、正確な数は誰にも分からないという程である。部員それぞれになじみの店を持つているらしく、特に下級生は裕福なせいかよく南のバーの話をする。部員同志でよく行くところと云えば「コンバ」「灯台」「オスロ」など安くて広くて気さくなところに集まる。こじんまりしたところもいろいろあるが某君より「誰も知っていない奴が来ない店でのむ権利をハク奪するのか？」とグラスをまさにつけんとするのでやめることにする。

それから有名な？屋台台地と屋台新町、これは今迄町角にバラバラとあつたものが市条例の為に集まつたものゝあのスリルとサスペンスにとんだ雰囲気ゾクゾクする程好きで明け方の七時まで一〇次会というはしごをして飲みまわつた猛者がいるとか。

（右手（めて）に杯、左手（ゆんで）にたずなしという言葉が永遠に残る様に馬術部の酒を愛する人達も最初の七帝戦に優勝してあの銀杯ですすきのの酒をくみあげた時以来これからも十年いや二十年それ以上続くであろう。

次回はすすきの、いや札幌のうまいもの、名物などを案内するつもりである。

### 一馬狂亭酒楽一

## 題名のない文

三年目 阿部 勝彦

原稿提出期限が切れて一ヶ月半になつた。遂に逆上した部報編集委員は、泡をふいて明日までに書けとわめき散らした。私はそのふき出た泡の一つ一つに、いささかの妥協も許さぬ、かつてない厳しさを見た。私の比類なき怠慢さも遂に、その小さな一つ一つの泡の団結の力の前に屈した。何か書かねばならない。いささかあせつた私は、「えいどうともなれ」と、気の向くまま筆の走るままに書きなぐつた。出来たものは得も言えぬ支離滅裂なひどいものであつた。その支離滅裂に、頭をつけようにも土台無理な話だ。

私と西部劇とは、恋人同志である。私が男である限り、私の恋人である西部劇は彼女である。どんな暴れ者でも、どんなに殺奴としても飲塵も女性的神経の細やかさがなくとも、やはり彼女には違いなからう。

しかし考えてみれば、百人近くもの彼女を熱い眼差して、見つけた男も稀に違いない。初恋の相手も忘れ、今に至つてもなお素晴らしき恋人をと、求めてやまぬ私は確かに稀代の浮気者であろう。一向につまらぬと、その名も姿も忘れ去つたものもあつた。一時のうさ晴らしの手段の対象として選ばれたものもあつた。あるいは強い想い出となつて、心の奥に焼き付けられたものであつた。確かに恋人の存在なるものは、人間の生活を左

右するものらしい。今、私が馬術部で結構愉快にやつているのも、彼女らの影響かも知れぬ。

西部劇の醍醐味を云々する上に必要不可欠なる騎兵隊、インディアン、駅馬車、幌馬車、カウボーイ……。どれをとつても、必ずそこに登場するのは馬であつた。しかし、どの馬も、あるものは輸送の、あるものは旅行の、あるものは戦争の、夫々の目的を果たす為の具であつた。馬とは可哀想な動物である。急ぐ時には拍車を入れればいいのである。鞭で打てはいいのである。インディアンに襲われた幌馬車隊は、円陣をつくつて馬を楯にすればいいのである。可愛いからニンジンを与えるのだからか、否、可哀想だから与えるのである。人間にとつて、人間以外の動物は全て何らかの手段としての具である。私は運動の手段として馬を選んだ。少しでも西部劇の醍醐味を味わう為に馬に乗る。そして進歩の跡に限りない喜びを見出し、やがては優勝の感激を味わいたい為に馬に乗る。馬の勝手な我ままは見捨てておけない。馬がそれを、迷惑とも感じないならば幸いである。

どうも変な具合になつた。早く歸書けとせさせる泡が悪い。まとまりもつかないうちに、手だけがどんどん妙な方向に動いてしまふ。

西部劇は恋人である。見つめているだけで、これほど楽しい恋人なんて、そうやたらといるものではない。

ヘンリー・フォランダの素朴な西部男ワイアット・アープ。純情可憐なヒロイン、クレメンタイン。仇敵の待つ眺めのO.K. 牧場

「パツキユーン」と静寂を破つた最初の一弾。

晴れて仇を討つたアープは父のもとに帰る事になつた。

「クレメンタイン……この美しい名を私は、忘れません……」  
再会を約してアープは荒野の彼方へと去つて行つた。

見送るクレメンタインの長い影

「いとしのクレメンタイン」のメロディが、荒野を渡る風に  
乗つて未だに耳に残る。

「荒野の決斗」は最も素晴らしい恋人の一人である。「駅馬車」も楽しい相手だつた。

「黄色いリボン」では、その幅数もある岩の割れ目を馬で飛び越すのに目を見張つた。体を真直に立てたまま飛んでいる。西部開拓時代が一九世紀で、イタリー方式の登場が二〇世紀初頭とすると、この映画、時代考証は確かだと見える。もし西部の中で、前傾して飛越するシーンがあつたら、それはインチキ映画であるか、あるいは彼がイタリー方式の創始者であるか、きつといずれかに違いあるまい。「リオ・ブラボー」の面白さは、その徹底した痛快さにあつた。しかし彼女とのデートも終幕近くになつて、わずかにいやな後味を残した。決斗は正々堂々行へべきはずである。特に主人公はかくあつてもらわなくては困る。ダイナマイトの煙でいぶり出して一挙に敵を降伏せしめるなんてのは、いささか卑怯との非難は免れ得まい。しかし考えようによつては、これが彼女の限らないヒューマニズムの現れかも知れぬ。いかに敵とはいえど、殺すには耐えがたかつたのかも知れぬ。その辺の心の動きは、しかとは分からぬが、例え手段が卑怯であつたとしても、その手段をとるに至らしめ

た動機が、ヒューマンなものに根ざしているのならば、それは許されるに違いあるまい。

西部劇の楽しさは、その廣大無辺なる地理的条件もさる事ながら、大体において正悪が判然としている点にも由来する。そして悪者は、自己の悪者たる事をはつきり認めているからなお楽しい。そえ故、正が勝ち悪が滅ぼされた時は痛快で、ヤンヤの拍手も送りたい。現実の世界はそうはいかぬ。どちらも自己の正当さを強く主張して対立する。第三者は判然とせぬから、いずれが勝つても後味が悪い。特にそれがイデオロギーの問題に関わつてくると、もう我々にはどうしようもなくなくなる。ヤンヤも引つ込んだきり出てこない。

西部劇は私の生涯の伴侶である。そして少しでもその醍醐味を味わい、かつうまくなつて活躍したいが為に私は馬に乗る。私の勝手な好みのゆえに、馬の方では、はなはだ迷惑に思つているかも知れぬ。私は少しでもその償いをしなくてはなるまい。ニンジンを持つて通わなくてはなるまい。せつせと当番やら作業やらに精を出さなくてはなるまい。せめてそれ位の事をしなくては、あまりに馬は哀れである。可哀想すぎる。

## 初めて試合に出た感じ

二年目 遠藤 裕子

去る十一月、福島で行われた関東東北女子戦は私にとつて初めての試合だった。八木さんや仙波さんが「一年のうちは見てる

だけでも為になる、後々の為にも参加して試合馴れしておきなさい。と仰言つたので上がることはなかつた。あまり歩いたことがなかつたので、汽車や船に乗るのが楽しくて、はしやいでばかりいた。尾根に杉が並び渡つているのを見ては、「立山」のたてがみと言ひ、日の出の美しさをみては優勝すると言ひ合つて、仙波さんの家へ押しかけて「キリタンポ」をごちそうになつたりした。試合の事は個人と団体戦で一個ずつ飛んでくればいだらうくらいにしか考えていなかつた。(もつとも上級生達は試合を気にかけていたけれど。)皆一緒に阿武隈寮(ジヨツキーの泊る所)に泊つていたが試合の前夜魚住さんのもつてきた経路図を寝ながら暗記した。私は経路違反の常習犯で出発の際も「経路に注意しろ」と言われてきたので、明日は大丈夫かと、ちよつびり気になつた。次の日は空も青空、身も心も空の青さに染まつていた。八木さんと仙波さんが北大Aチーム、勝ち進んで四位だつた。私と阿部さんがBチームを組む。一回戦で沈没した。この時くやしい事に本当に面白くない事に、私は例の経路違反をしてしまった。私は後段のプロステイーだつた。(フロステイーは名の通り白馬である。)後段というのははせわしくならない。鎧を直す暇もなく呼び出しがかかつて、単一を一つ飛んでおまけに境の繩を飛んでスタート。(これは失権にならなかつた。)第二で私だけ宙を飛んでいてに思いつきりぶつかつた。それからすぐ馬にのせてもらつて順調に飛越。前評判ではフロステイーはひつかける事になつていたがそんなそぶりも見えず障碍も北大で練習した時より低く見えたので落着いている事ができた。駆歩につれて赤と白の旗が

近づいては過ぎ、過ぎして第五から第六に到る直線コースは風切る音して天翔ける心地す。但し第七のうさぎまでできて失敗した。うさぎを途中でできられてもう一度飛びにくいなあと思いなからドラムとピラピラとの間に割り込んで又ピラピラを飛ぶ。とたんに笛がなつて退場となつた次第。見物していた仙波さんから教えといたのに」とじだんだを踏んだが、後の祭。これが必要れば、ゴールできたのに。今まで最高の出来だった。くやしくも信夫山！寮にもどる途中まああるいボンボンの一杯下つた木があつた。誰も来ないのをみすまして登つて取つた。初めて見る奇妙なものを家へ帰つてみせたら、鈴掛の実だと教えられた。阿部さんはローロンの毛を三本むしつて私に一本くれたけれど、私は失くしてしまつた。夕方レセプションがあつて明日の個人戦は又もやフロステイに當つた。経路は昨日よりやさしくてダブルがなくなつたのでよもや二の舞はしないだろうと思つた。その上、フロステイだから……と思つて武者ブレイした。今度は乗馬してから随分時間があつて八木沢さんに十分コーチしてもらつた。第二第三第四と一度逃避され第五では反抗されて大分手こずり時間切れかと思つたが何とか飛ばすことができた。その後は調子よく飛んで行つた。実際は飛越と言うより障礙の上を駆けぬけていくという感じしかなかつたが。とうとう最後の第十障礙三段が見えてきて、障礙が足の下にみえた時初めて完走したという思いでうれしくなり顔中笑いで一杯で馬の首をたたきながらゴールした。大谷短大の赤裏さんが「よかつたね」といつて走つて来てくれたのでますますうれしくてそこらを二人で飛びはねて歩いた。減点

三七・二五だつた。フロステイに乗つた人達の中では中頃の成績である。その後一週間位私は気嫌がよかつた。八木さんはニユースタイルに乗つた。今年の馬の毛色の新しい流行は白と黒のブチでございます。という言葉が口をついて首も脚も短かいまだら牛がドタンドタンと飛ぶのがおかしかつた。仙波さんは難しい光榮できれいに飛んで帰つてきた。個人戦の時は大勢の人が馬場内をうろついていたので混雑して馬にふまれた人も出た。それから東京の学生は鞭をよく使う。拳がガタガタしているのに鞭でひつぱたいもだめだろうに。馬が可愛いかつたら貸与馬の主催なんてするもんじやない。これが初めて大会に出場した心境である。氷のはつた競馬場で月夜におきて一時間半びつしり障礙練習の強化合宿。大会は練習の技術的成果でしかない。合宿でのあのピリツとした雰囲気。飛ぶという一つの事に集中した熱心さ。私にはこちらの二つの方がより大事なことと思える。楽しさと一緒にこの二つが。　　いおわり

### 帯畜合宿に参加して

一年目 阿部 絢 子

十二月二十二日から二十九日までの八日間私と遠藤さんは交換部員として帯畜産大学馬術部の合宿に参加しました。部員総会で交換部員のことについて聞いた時、行きたいとは思いませんでしたが、本当に行けるとは思つていませんでしたので、汽車に乗つても二人共半信半疑で帯広駅に着いてようやく畜大へ行く

のだという実感が湧いてきた位です。駅には天池さんと板橋さんが迎えに来て下さいました。

その夜は女子寮に泊まることにして、天池さんに合宿所へ連れていつてもらい合宿していた人と初対面の挨拶だけで、次の日から合宿所の隣りの部屋に私達二人と天池さんと泊り込みました。この合宿所は厩舎の内にあり、もとは穀物用の場所だったそう、鼠防止のため窓をぬかし畳の下までトタン張りでした。そのためストーブをどんどん燃やすとこの部屋の片側にある三段ベットの一番上は暑くて暑くてたまらないそうです。

合宿は三年生二人、二年生と一年生二人の五人でしていました。一年生のことを「とおちゃん」とか「かあちゃん」とか呼ぶのでどうしてかと尋ねたら、食事のこと一切をしているからだそうですが、お料理の腕前をよく自覚している私としてはあえてつくりますともいいかね、かあちゃん、のつくつて下さったのを食べただけでした。このように少人数のせい、夏の一年目の合宿とは違つた雰囲気、何か親密さを感じさせるような合宿の様子でした。

一日は午前六時からの馬房の馬糞出しで始まりました。馬房は広く寝糞は豊富でした。そして草架は北大のように乾草を押し込むのではなくて上から投げ込むようになっていましたので、始めは上手に投げ込めず頭から乾草をかぶつたりしましたが、慣れるにつれて飼付時に草架にフオークでたくさんの乾草を投げ込むのはとてもおもしろくて気持ちのよいものでした。後で厩舎の二階にあがつてみたのですが、そこは梱包された乾草でいっぱいでした。

練習は九時手入れ開始で、それから二時間位乗りました。練習前の手入れは馬体についている糞を払う程度という事で極く簡単で時間をほとんどかけず、練習後の手入れを念入りに行っていました。装鞍して乗馬。北大ではそばにいる人に足を持ち上げてもらいますが、ここではそうはいきません。飛び乗りをしようとしたが駄目で籠を一番長くしてようやく乗ることができました。以後乗馬の際にはいつも一苦労し、この時つくづく飛び乗りができたらなあと思いました。馬場は使わずその横を通り過ぎて牧草地まで行きました。そこに雪は草の先を見せている程度に積つていたので先頭の馬が蹄跡をつくりましたが、今日の蹄跡は昨日の蹄跡とは違うというふうでした。練習は馬場姿勢籠上げで速歩・軽速歩を集中的にしましたが、時々「前傾」という号令がかつたりしました。そして騎坐ということをよくいわれました。速歩の時など野原の中ですのうっかりすると馬はどこまでも真直ぐ走つたりするのです。又、向こうの端まで一頭ずつ駆歩」といわれることもありましたが、加速度のついてくる馬上でこの馬を止めることができるかしらと思うと少々どきどきでした。それで競馬をやらせてあげようかと言われましたが駆歩で満足していた私達はそれを慎しんで辞退しました。籠上げをしたのはじめてでしたし、馬場姿勢では籠をはいてさえ軽速歩ができない位の私ですから、どの馬に乗つても馬に乗つていふことだけで精一杯で、帰つてからどれだけの馬はどうであつたなどと尋ねられても何にも答えることができなかつたのは情ないと思ひました。

そのような蹄跡運動のあとは中間籠になおし遠乗りにてかけ

ました。まず牧草地より一段と高くなっている道路に飛び上がり、高い落葉松並木に沿って進み、足跡一つついていない斜面を蛇乗り状に降りたり昇ったりして最後には大小いろいろな木がはえている斜面を降りました。その時私は下の雪面と馬のたて髪とを見ただけで、馬まかせに前の馬にびつたりついて降りましたが、降り終えたあとの輪乗りの時改めてその斜面を見てよく木にぶつからなかつたものだと思心しました。又ある時は落葉松林の中をあちこちと回りましたが、これは狭い木々の間にあると馬が緊張するためちよつとした脚に反応するからよいのことでした。その帰り道で前の馬が突然何かを飛び越えましたが、障碍物があるように見えませんでしたので変だと思つてみると、溝がありました。馬は乗っている人間にはお構いなしに飛び越えました。

三鞍程障碍練習でした。障碍物は道大の時造つたとのことでみんなきれいにペンキが塗られ、青空の下のをそれらは積木を思わせました。飛越の際手綱を引くことは絶対禁止で、手綱は先端で持ち、もし必要なら髪につかまるようにいわれました。

単一を五個等間隔に並べ低いものの常歩通過から始め、五個めを九十輝にして速歩通過を繰り返しました。障碍三鞍目は経路をつくつてドラム・かまぼこ・三段など一米前後のものを飛びましたが飛ぶ度に落馬してしまいました。最後にこの高いのを好きな馬で飛んでもいいといわれました。それは段ちがい平行の下にドラムを二個おいたものでした。馬がとび上がった時には馬上でしたが、次の瞬間には地面でした。後程聞くとそこによればそれは一米四十あつたということです。久保田さんが道産子

に障碍を教えるのだといつて、それに乗つて障碍を飛ぶのは愉快な光景でした。

何日目かの夜、緑が丘にある部長をしていらつしやる浦上先生のお宅へみんなで出かけましたが、家に着くまえにいろいろ予備知識を与えられました。例えばこうです。先生は必ずこう質問される「きみは畜大ではどの馬が一番好きかね」と。その時は竹若と答えること、なぜなら先生は竹若がたいへんお好きだから。先生のお宅へ着いて話をするうち先生は尋ねられました「畜大の馬を一頭あげると言われたら何にするかね？私なら……」そのあと御家族の方といつしよに百人一首をしたりして、楽しくすごしました。その帰りはバスがあるにもかかわらず、街乗の道順を教えてもらいながら、歌を歌いながら歩いて帰つてきました。黒くそびえる落葉松の木々と、空のたくさん星とがとても美しいと思えました。頬にささりこむような寒さで、合宿所に着いてみたらオーバーの襟が白く氷りついていました。

最後の日は街乗で、その前日は休馬で厩舎の煤払いをしましたがその時加藤さんと妹さんとがいらしてました。そして次期の合宿に参加する人も二人程みえてました。その夜は常々きいていた寿司コンをしました。

街乗の日は雪でした。帯広へ来てから雪が降つたのはこの日だけで、あとは青空の好天ばかりでした。馬房内で装鞍。馬は広風。緑が丘公園まで、途中は交通量も少なく、静かな住宅街でした。公園内で駆歩をした際一頭が放馬されて厩舎にもどつた他は何事もなく終わりました。馬房内で汗のかいた馬体を藁

でこすつているうちなんだか、この馬は馬でないように思われ  
てきました。

その日、帰郷する畜大の部員の人々といつしよに無事帯広を  
離れたのです。最後に、遠藤さんは多大なる努力をもつて頭絡  
のつくり方を学んできましたから、彼女は頼まれたら喜んでそ  
れをつくつてくれるでしょう、ということをつけ加えておきま  
す。

## 自馬大貨車積の感想と

### 一年坊主のツブヤキ

一年目 田 中 力

十月二十七日、北大より北飄・朝清、畜大より広風・雲霧・  
鳥華以上五頭と、北大と畜大より付添二人づつと、飼料殊に  
乾草がうんざりするほど積みこまれた、いや詰めこまれたので  
ある。なにしろ乾草が多すぎて寝ワラが入らなくて、着いてか  
ら馬事公苑で寝ワラを買つたほど。それに乾草がゆえに人間様  
の床は馬の肩のあたりの高さ。それでも場所が足りなくて馬公  
の頭の上にも棚をつくつて、それがキシム程乾草をつめこんだ  
のであるから（お陰で幾度も補強をさせられた）でもとにかく  
汽車は桑園の駅を離れた。先妻 同輩（後輩のいないさびし  
さよ：）諸兄弟から絶大なる差入れと、「死ぬなよ」という声  
援を浴びて（？）。

思うに、馬と一緒にあの薄暗い貨車に揺られて札幌から東

京まで何日も旅行する。なんてのは小生馬術部に入るまでは夢  
にも見なかつた。が、しかしこの旅行の楽しかつたこと、知る  
人ぞ知る。

小生の貨車積は、夏の道大会終了後帯広から札幌まで運んだ  
のがいわば初陣？であるから、こんどはそんなに心配すること  
もなからうといわれるかも知れないが。どうしても落ちつか  
なかつた。「人も馬も無事生きて着けるかしら」なんて今考えて  
見ればいとも愚かなことであるが本当なんだから仕方ない。危  
険性はあつた。第一に積込のとき時間がなかつたので梓造が不  
完全だつたこと。第二に貨車のドアを荒縄で固定したが、晝月  
末とはいえ人と馬の熱と風が入つてこない（ほとんどの馬が汗  
をかいていた）ために夏みたいな暑さだつたので、連絡船の中  
や駅の引込み線の中では全開出来るよう出発の翌日早くもそれ  
をはずしてしまつたこと。後から気が附いてゾツとした。それ  
れに馬には燕麦の袋はつぎつぎと喰い破られたことなどなど。  
しかしとにかくくまる三日間馬のそばにつき、きりでいやとい  
うほど愛すべき馬達とニラメツコしながら道中これといつた大事  
もなく高野さんが靴をなくして、スリッパで青森駅を闊歩し  
て人目を引いたり、小生が仙台で気車を見失つてあわてふため  
いて、ドブに落ちたりしたぐらいで、一洗谷駅についた。夜だつ  
たのでおろすのは朝だといので、小生の家は近くだからフトン  
の上で寝たい思つて家へ行くと茶の間の入口をくぐるや否や、  
「場違いだ」というわけで風呂場へすかさず案内されたのであ  
るからその時の衛生状態や推して知るべしである。

それにしても馬というのは何と辛抱強い動物であるか、人

間とは何と残酷なのか、あの小さな箱の中に何日も押込めて、食べて寝て出すこと以外のすべてを拒絶する。いやそれさえも満足にはされていないなどと考えぬのは人間のエゴイズムかも知れない。あさつて独語の試験があるのに気乗りがしないので筆をとつてみた。

## 貨車について

一年目 春 田 恭 彦

我がクラブの伝統といえども知らないが、貨車積作業が終り、あとは発車を待つばかりの時、一服しながら、残る人間が乗る人間に差し入れとよばれることをする。監獄に居る者に物を持つていつて、小さな窓から物を差し入れるのが本当の意味の差し入れであるが、貨車の場合も牢屋のような格子もあるし、そう大きなちがいはないので、この言葉は妥当であろう。渡す方にとつても、もらう方にとつても、非常に楽しい一時である。

小生も、このはかなくも楽しい一時をすごし、渋谷を発つた。しかし発つたというのは名ばかりで、山手線の各駅でことごとく停車するのである。満員電車の客は我々を見つけて何やらしやべつてゐる。「北大の馬術部なんだと胸をはつてみてても相手には通じない。何かさげすんだ目つきである。誇があるならある程度のアピールは必要である。今度貨車に乗る時は必ずチヨークで書くことにした。「北大馬術部」と。

大官をすぎるところから、我々を乗せた貨車は快調に進んだ。

馬は三頭とも「貨車に慣れていますよ」といった風で落ち着いたものである。馬についていえば何の苦勞もなかつたといえる。馬は貨車の中では飼付を減らされるが、人間はどうか。運動しないから別に空腹は感じないが習慣からであろうか、なんとなく何か食べたくなる。どこだつたか忘れたが東北のある駅で例によつてそばを食べていた。さてといつて貨車にもどり、乗つた瞬間に走り出したことがあつた。おいてゆかれたらどうなるのか？

稲の刈り入れ時に東北を汽車で横断するのはおもしろい。それは稲の乾し方である。私はその景色が好きなのであるが、地域によつて乾し方がそれぞれがうのである。そしてある地域に於ては見渡す限り同じ乾し方をしている。この偉大なる風物を見つけて感嘆の対象とせぬものがあるうか！

二日目の朝、目をさますともう青森に着いていた。バケツをさげて、近くにいた駅員に水の場所を聞いたが、何やらわけのわからないことをゴモゴモ言つている。何だかわからないが指のさす方向に歩いていつたら水があつた。東北に来て人と話す時いつも思うのだが、ここには東北のにおいがある。鼻で感じるにおいではない、心で感じるにおいである。札幌にも東京にもそれはない。だから私は東北が好きである。何となく親密感をおぼえるのである。札幌や東京の街のような疎外は一概に感じない。

いよいよ北海道上陸である函館に着いたのが午前二時ごろであつた。五稜郭操車場程荒つばい所はない。北巖号なんか白目をむき出して足をふんばつていた。函館を出ると非常なる展望

が開ける。右手に太平洋左手には大沼と駒ヶ岳、日が当つてその雄大さは見事なものであつた。

どこかの駅で静修学園の女生徒を乗せた汽車とすれちがつた。停車中に貨車から首を出していると、向うでも窓を開けて話しかけてくる。女というものはどこかへゆく時必らず大量のおかしを持つてゆくものである。「おかしをくれよ。」といつたら案の定二つ返事でボンと菓子包みを投げてくれた。窓の中をみればいわゆる美人とよばれる者も何人かいるのであるが、そういう奴は絶対に窓なんか開けやしない、中でツンとしている。思わぬ所で女性心理の一端がみられたものだ。

次の朝はもう桑園に着いていた。五時ごろから先輩が貨車に来て作業が開始された。一まづホツとした。そんなわけで予想の半分の三日で着いてしまつたがとにかく楽しい貨車旅行でした。

## 落馬ノートより

五月十九日 午後二時、カツコリの鳴き声！二こえ、三こえ木立の影から。当番泣かせの春の空も青く晴れ、初夏の訪れを告げるカツコリの声

一九二五年六月二日 F 五八：四〇  
生まれまじした！生まれたのです！新しく、そしてたくましく

(まさにとくまじしい……おやじなみのパンチを腹にくらいました。)一つの生命が生まれ出たのです。生命の神秘とそのたくまじさをまのあたりにみて、僕の口は感激と驚きとで、しばし開いたままでした。なにはともあれ、めでたいめでたい……いずれオシロコか何かが出るそうなの。

(追) この決定的瞬間に接し得たのは小生唯一人でした。これもひとえに……だからでありましょう

人間に失望して人間との間に失われたものを求めて馬と共に生活する様になつた。今の僕は何か満ち足りたものを感じようとしている。この喜びをいつまでも大切にしたい。

馬は純粋で裏切らないだろうから。一つ一つの世話の仕方を学んで行こう。

僕「僕と馬とはうまが合いそうだよ」

友「君と馬との違いは鼻の下が長いか鼻の上が長いかだよ。」

六月二十七日 北涼とデコ

三十分位草を食べさせる。ただし北涼だけ、デコはおつきあい程度に時々引張つて口に入れるだけ。北涼のパフンを嬉々として口につつこみ、本気で食べている。どうしてかしら。本当はやめさせたかつたのですが自然の動作を考えなおし、目をつむる。デコは突然走り出し急旋回し、前肢、後肢で立ち上り。北涼の首にいたずらしついに北涼の顔に一発くらわせ、とうとう北涼本気で怒る。一〇センチ位の深さのミゾをデコ勇氣を出して飛越するデコは手入れ袋をくわえては投げ、くわえては

投げる。蹄油カンをひつくり返し、ポリバケツをころがし、一輪車の馬糞に足をつつこんで、あわてふためく。そしていつのまにか背も伸び、お腹のシワも伸びていた。(仙波)

七月八日 午後二時頃

「この電報どこで切つて読むのですかね？」と恐らく農場の人だと思ふが白衣を着た人物が紙切れを持つて来た。何ぞ知らん、これこそ待ちに待つた何であつた。おこの感激(人学して初めて。)それなのに「どこで切つて読むのですか？」とはダイナミックなシヨックもいい所。ムードも何も死に絶えて。ああ何故こういい時に、神はお戯れ遊ばすのか。……という様な戯言はさておいて。実を言うと感激が余りビンと来ないのだ。というのは他の連中に早速伝えたのだが、はつきりした反応がない様に見えるのだ。(実際はそうでないかも知れない。小生の感覚器官に欠陥があるかもしれない。)えてして猛烈なる感激はこういう形で現われるのかもしれない。いわゆるビンと来ないというやつだ。久しぶりの勝利である。その為勝利の感激をどの様に表現していいのかわからないのではないのか。特に二年目などは小生の感じではその様に見える。これも時につれ、選手の人達が帰ってくるなどで盛上りを見せるであろう。この盛上りの中で今後のあらゆる試合を着実に勝ち取つて行くという一致団結した空気が起れば幸いである。又必ずそうしなければならぬ。

本当にビンとこなかつたのです。しばしたつてビンときた時

本当にとび上つて喜んだのです。敗戦。敗戦。この二字に神経を犯された小生にとつて、すぐビンと来なかつたのはしごく、あたり前の事であり、しかしてビンと来たときの爆発的なうれしさも又当然であつたのです。それにしても四年目の皆さんほんとによくやつてくれました。

一日二十四時間である。そのうち六時間馬に費やされ八時間寝て残るはずが……本も読みたい、勉強もしたい……しかしなぜか馬を休む気になれない。はじめは馬の顔もわからなかつたのに、北翔も北騾も皆同じに見えた。なぜチビとよぶのか不思議でならなかつた。今ではどれも個性のあるかわいい奴だ。他のクラブにはない斜が馬術部にはある。人間同士はいやになつても馬をにくむ奴はなからう。必死で乗る。何も外の事は頭のない、何のために馬に乗るか？こんなことを考える奴はバカだよね

一年目

運動部を楽しむの手段として利用すると言う。クラブの性質上本人がどんな動機をもつてそれに加入していようと、それは本人の自由である。しかし彼が単なる快楽的な楽しみを目的とするならば、必ずや途中で挫折してしまふであろう。何故ならば、部は決して、その様な楽しみを与えてくれないから。毎日の練習のことを考えてごらん。馬にのつてこりや面白いとかよきかな、よきかな等と悦に入つていられるかい？容赦のない叱咤叱責の嵐だ。泣きたくなる程苦しい時だつてある。もしそこから、ゲームでもしている様な楽しみを感じる奴がいるなら

ばそいつは大したものだと思う。練習はきびしくかつつらい。決して楽しいものじゃない。しかし最後までクラブを続けて行こうとする人間は、そのきびしいかつつらい練習の中からのえほんの一つかみではあつてもそれはそれは大きい喜びを体得した事のある者なんだ。毎日毎日の練習の中から、わずかでも得られた自分の進歩の跡には彼は大いなるそして純粋な喜びを見出すのである。その喜びこそがクラブを続けて行く為の原動力となるのである。そこにはミエ等という愚かしいものはない。自慢話にでもしてやろうなどという打算も存在しない。部に単なる娯楽性を求めんとする者（何を求めようと自由ではあるが。）にはこの様な喜びは分り得ないし、しかしてミエ云々、自慢話云々などという暴言を吐くのである。気をつけたまえ。

#### 一 樹陰思

学生目馬大会で関西大学の馬が死にました。僕は丁度近くで箱番をしていたので、ふと目を上げると丁度僕の一〇メートル位前でしたが、一団の人だかりがしておりまして、競技（スチール）も一時中断と声が聞えました。私は一緒に箱番をしておりました東北大の一年目と行つてみました。人だかりの中には馬一頭倒れていたのです。馬は鼻血を出し、首は誰かがかかえておりました。気を失っている。起せ起せ。誰かが叫ぶのが聞えました。その人達は長靴で盛んに馬の背をけつておりました。僕は馬の顔を見ました。馬はかすかに聞こうと努力しておるようです。私はその時（馬には全くの素人ですが。）直感的に否、生きるものの本能の働きが私に恐怖を持たらしたと

言つた方が良いかも知れませんが、その馬がもう数分の生命であることを知りました。起きる。数分後に死なんとする馬を長靴でける人。恐しい光景でした。かすかに開いた馬の眼は光つておりました。私はその場を離れました。数分後に馬は死にました。自動車が出て馬はどこかにつれて行かれました。競技は又始まりました。

#### デコを訪れるの記

デコ、その名も美しい「北秀号」が社台へと去つたのは十一月二十三日のことでした。そして私達（八木沢さん阿部、遠藤、仙波）の訪問は二十七日の午後でした。折りから前夜初の積雪。車は八木沢さんの名運転にもかかわらず遅々として進まず、社台に着いたのは三時を過ぎた頃でした。しかし、この長い車中の楽しさ、！皆様の御想像におまかせしましょう。デコは奥の厩舎に入つているとのこと。早速案内を受けて行つてみました。広い広い放牧場に離されている仔馬七頭。夕暮が近づいていたせいもあつて私達が車を止めた時にはみんなかたまつてラチの近くにおりました。用意の人参を手に入れた三人は放牧場の中へ。最初こわがって入れない人もいたのは少しびっくりしました。呼べば歩み寄るデコ。まだ忘れてはいなかつた様です。人参を食べる時右側の歯だけで食べるクセをみつけました。北大当時みられなかつたものだと思います。食べ物全部をその様にかみます。心配になつて牧場の人からみてもらいました。「歯は何ともない様だ。クセでないの？」と言われ少し安心しました。デコの同室馬はサラの早産仔。一と月早く生れおち、その時か

ら両前肢の関節異状。「馬の小児マヒみたいなものさ。」との説明。しかしこの馬、放牧場からの途中で逃亡。あつけなくつかまつたデコにくらべ、十分位も逃げ歩いたでしょうか。帰りは人間が前肢を手にもち後肢だけで帰つて来ました。歩く時、頭を上下に振り、その振幅のものすごさ。可愛いな、可愛そうにと思つたのに馬房に入るやデコより強いことに気がつきました。長さ二メートル位のトイの様な所から食べます。細かく切つた人糞が色取りもよくたくさんまざつているおいしそうなかばでした。デコは近づいては追い払われ、結局満腹してから、ようやく食べさせてもらつていました。二メートル位の幅の隣の馬房では五頭が顔を並べて食べているというのに一人占めをして近よせないのですから馬の世界は激しい。ボスの子はボスになると言うのにデコはため。人糞をあげようと思つても他の馬が近づくと思つてしまふデコ。二月も遅く生れて小さく途中から入つたのでまだなれていないからと、牧童は言っています。「よく食うぞ。」と言われましたから結構ホームシックにもかからず元気なのでしよう。

以上簡単に報告致します。御退屈様！

1 仙波和子1

私が聞いた馬の会話

朝清 ああ腹がへつた。

北颯 ホント、この頃何で乾草食べさせてくれないのかしら。

北涼 だから夕方は走られないのかもネ。その上二回も乗られ

たらまいつちやう。それに寝ワラだつてきたなくて。

北翔 人間がしていた話によるとお金がなくて草が買えないん

朝清 だつて。それ程苦にもならないけれど。じようだんじやないぜ。腹がへつてへつて目を開けてるのもやなくらいだ。汗も出やしない。それにこの頃いやな所にガラガラ音のするものが出て腹にこたえるなあ。

俺 俺はあの音が大嫌いでね。ドラムの音と似ているだろう。あの音を聞くとガラに似合わず胸ガドキドキする程驚く

ね。

北聳

同感同感。人間の気持つて本当に分らないネ。うまいものを食わせてくれたり、俺達のいやがる事をしてみたり。人間同志憎んだり愛し合つたり苦しんだり。我々の社会にそれが無いのが悲しいよ。

北晨

そこなんだ。それでどうも人間という奴には好感がわかない。あのキザな顔付きなんかを思い出してみる。どいつもこいつもツンとすましてる。皆私達を愛してくれてはいるけれども憐れみにすぎない愛だ。エンバクなんかくれてもちつともうれしくない。だから私、人間共がよつてくると尻をむけてやるんだ。そうするとみんなびつくりして逃げる。その格好なんか本当に面白いよ。アオさんなんかずいぶん人間に好感を持つているみたいだけどう思う？

北颯

そうだなあ。それ程いやらしいとは思わなければ時々頭にくることもあるね。腹をつつかれて口をガタガタ引つ張られて。そういう時はつつ走ることになっているんだ。けど私はもう悟つているんだ。とにかく馬なんだから人間にあまえて生きて行こうとね。

北翔 どうしてもそうは思えないなあ。アア日高にいた頃はよかつたなあ。

北揚 人間つて奴は本読んだり勉強したり、我々に乗つたりいろいろなことをするけど何が一番面白いのかね。我々は食つてゐる時が一番いいけど。

北雪 やつぱり食つてゐる時だらうな。だけど又おかしなもので、大抵の奴は他人にはそうはみせないで生きる為には方がないから食つてゐる様な事を言つてゐるぜ。どうも人間はキザでいかん。どうしてもつと素直になれんかね。

北涼 ここで提案があるのだけど。今度から人間についてもつと良く観察してみようよ。我々の知つてゐる中で一番わけのわからない動物だから面白いかもしれんよ。アツ誰かきた。

朝清 やつとメシにありつけるぞ。ずいぶんまたせやがつたな。

オイそこのガキ。早く飼付持つてこい!!

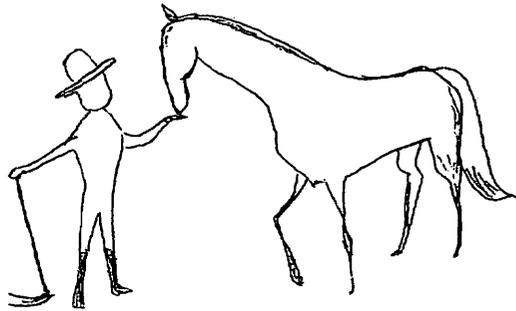
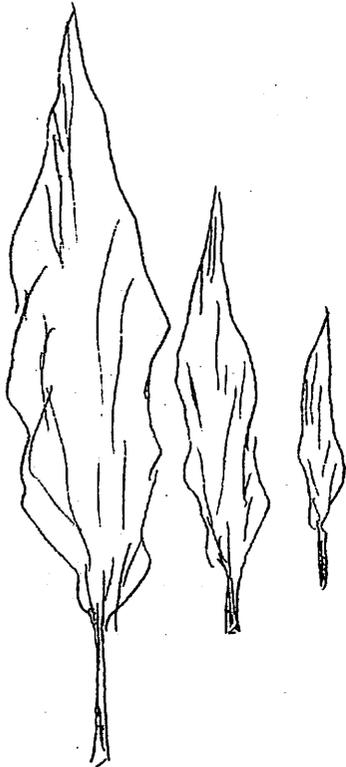
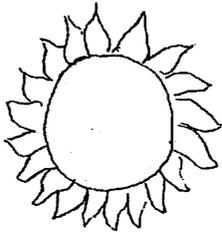
みんな 早くしろ。早くしろ。早くしないとけつとばすぞ!!

朝清君が傷をしました。足がはれてかわいそうです。でももりもりお昼を食べてるので少し安心しました。朝清君は手入れの時いつも僕の顔をみます。にらめっこをするといつも負けてしまいます。だから恥ずかしくなつて手入れは丁寧にやつてやります。そうするとうれしそうな顔をしてエンバクをねだるのです。フキの下はくすぐつたいからしないでくれと言います。がわがままを言つちやだめだといつてこすると笑いながら逃げ回ります。朝清君が笑うと本当にかわいらしい顔になるのです。

大人の人達にはそれがわからないらしいのですが。それから外人にもわかりません。いつもくる外人の女の子は朝清君にはニンジンをやります。朝清君は僕にだけは本当の事を言つてくれます。もうそろそろ年なので本当は一人で原っぱの真中でくらしたいのだそうです。でもみんながキヨ、キヨつてかわいがつてくれるし、一年目の人達の良い練習馬になつてゐるので、ここでも結構楽しいそうです。この間言つていましたが、一年目の人の足を踏んでしまつたそうです。あの時は急に体が安定する前に後足を上げられてしまつたのでころびそうになつてやむをえず踏んでしまつたのです。手入れをする時はもうちよつと僕を考えてくれと言つていました。でも本当に悪かつたと言つていましたから朝清君をいじめないでください。弁償はできませんが今度乗けた時には言うことをきくそうです。朝清君はこの馬術部にきてからもうずいぶんたちましたが、その間数々の名選手を生み出しました。先輩の方々だつて朝清君にはずいぶんお世話になつてゐるはず。この間汽車にゆられて東京に行つた時は東京の先輩が涙を流して喜んだそうです。僕は昨年夏帯広から朝清君と一緒に帰つてきましたが、小さな貨車の中に六人も寝たのではみ出して朝清君の腹の下に寝ていたことがありました。でも前足を広げて踏まない様にしていくれたので良くねわれました。あの時は彼もずいぶん疲れたと思えます。前足を動かせば僕の足を踏んでしまうのですから少しも動かすこともできなかったのです。お礼を言つてエンバクをやつたらニコニコしていました。朝清君が好きなのは人参、エンバク、青草の順です。僕が一番好きなのは○○○だと言つた

ら、まゆをひそめて「まだ若いね。」と言われました。朝清君は僕の考えている事をみんなわかっけてしまいます。いつだつたか、シヨボクして一人で厩舎へ行つたら「そんなに考えることないよ。そういう段階をとおして君達はどんどん進歩していくのだよ。」といつてなくさめてくれたのです。僕は少し気持ちが晴れて、次の日の朝一時間も前に朝の練習に出てきました。丁度その日は朝清君にのれたので、とてもうれしかつた様におぼえています。その日はいくらどなられても、ちつとも聞えませんでした。朝清君、これからも元気でちつともちつと長生きして僕の友達になつて下さい。

オワリ



北海道大学馬術部卒業生名簿

歴代部長

氏名	卒業年度	住 所	電 話	勤 務 先	電 話
永井 一夫		札幌市南二条西一二丁目	二一四三五	北大名誉教授(第一代部長)	
高松 正信		東京都世田谷区松原町四〇二九四		北大名誉教授(第二代部長)	
黒沢 亮助		札幌市北一条西二二丁目	六一〇五七	酪農学園大学教授江別市西野幌 北大名誉教授(三代部長)	
太妻 康光		函館市湯川町二の八		函館高専校長(第四代部長)	
松本 久善				元農学部教授	
半沢 道郎		札幌市北六条西一二丁目	二二一三六八	北大農学部教授(第六代部長)	

特別会

氏 名	住 所	電 話	勤 務 先	電 話
野間口 英喜	東京都杉並区永福町三三五	(三三二)七六一七	中央区西銀座八一 日航ホテル	(五七一)四九二二
染谷 五郎	札幌市豊平三条四丁目	(八一)八四五六	川崎市日進町一 川崎日航ホテル	川崎四一五九四一
滝沢 政雄	熊本市新屋敷町傘二二一	(六二)一四五二	染谷 商店(文具)	(八一)八四五六
原島 つる	札幌市北二条西二七丁目	(八六)二五〇四	熊本営林局事業部長	
庄内 貞夫	札幌市白石中央五三の三	(八六)二五〇四	原島洋装院々長	
武田 忠幸	〃 南六西二〇 北都ハイヤー	(五六)三二八六	齒科 医	(七二)七二四一
山本 智	北都バス総取締役社長 札幌市北一〇東六 国鉄アパート		北三〇東一(札幌乗馬クラブ)	(七三)四三三二
			札幌公安室警動隊今安主任(小隊長)	(七二)二二一一
				奥六五九三三三

氏名	住所	電話	勤務先	電話
小野 忠	札幌市北一八条西五丁目	(七二)一五六	北大モータース社長	
鎌田 鉄 總	札幌市北二一条西二丁目	(七二)一八七一	札幌電名部長	
内山 勘次郎	札幌市北一六条西二〇丁目	(七二)六五九〇	札幌電名部長	
今井 敏 正	札幌市新琴似町四四六の六	(七三)四六九二	札幌電名部長	
布浦 敏 一	札幌市北三条西一六丁目	(六二)三八四〇	札幌電名部長	
富樫 英 治	札幌市北三条西一六丁目	(六二)三八四〇	札幌電名部長	
阿部 善 吉	札幌市南七条西九丁目	(三三)五八六〇	(札幌乗馬クラブ)	
阿部 広 道	札幌市北一四条西一九丁目	(三三)五八六〇	札幌電名部長	
鷺田 弥 作	札幌市南七条西九丁目	(三三)五八六〇	札幌電名部長	
稲垣 新 一	札幌市北八条西九丁目	(三三)五八六〇	札幌電名部長	
高橋 留次郎	札幌市北二五条東三 八木方	(三三)五八六〇	札幌電名部長	
石井 喜一郎	札幌市北二五条東三 八木方	(三三)五八六〇	札幌電名部長	
田中 昭 志	札幌市北二五条東三 八木方	(三三)五八六〇	札幌電名部長	
岡沢 大	札幌市北二五条東三 八木方	(三三)五八六〇	札幌電名部長	

会 員

氏名	卒業年度	住所	電話	勤務先	電話
中野 友二郎	昭四農	東京都南多摩郡多摩町桜ヶ丘三丁目三三の四		飯野重工業舞鶴工場	
平山 常 介	四工	東京都三馬市井ノ頭五丁目五二一七		農林省一勝種畜牧場	
中谷 勝 紀	五工	東京都杉並区清水町二一六		地方競馬全国協会	
間 克 市	六農畜第二部	十勝国河東郡音更町同場内			
岩 垣 敏 夫	六農	東京都新宿区百人町四の四二〇			
藤居 金太郎	七農	ブラジル・サンパウロ在住			
田畑 武 夫	一〇医	札幌市南五条西二丁目		漁業	
久 葉 昇	一〇農	兵庫県多紀郡城篠山町郷家一八七五の五		田畑産婦人科病院長	
				兵庫農大教授	

加藤 英夫 一一 医	高杉 直幹 一一 理 化	脇田 代子郎 一一 農 化	森山 武雄 一二 医	小村 達夫 一三 農 生	高井 久芳 一三 農畜第一部 化	前川 静弥 一三 理 化	山下 正亮 一三 農畜第二部 化	石井 昌長 一三 農 化	小田 昇 一四 農 畜	中尾 敦司 一五 工 機	西村 雅吉 一五 理 化	木谷 清喜貞 一五 農 実	石井 和彦 一六 農畜第二部 化	伊関 悦郎 一六 工 鉦	河原 清作 一六 工 土	熊沢 洗 一六 農 実	関 義人 一六 医	高木 央郎 一六 工 鉦	中曾根 賢 一六 農 実	
札幌市南一条西二丁目	札幌市北七条西一三丁目	四日市大字赤城二の四	青森県南津軽郡浪岡町 国立岩木療養所	岡山市津島 岡山大学理学部内	札幌市北一条西一七丁目	室蘭市新富町一丁目六番一四号	札幌市白石町本通り八八の三五	千葉県稲毛町四丁目一二四九 転居先不明	静岡県伊東市宇佐美二七八七 ホテルカスガ	東京都杉並区天沼三の五八一	函館市港町	金沢市古寺町一二	鳥取市湯所町一の三〇七	函館市官前町二二三	小樽市忍路郡塩谷村	十勝国河東郡士幌町士幌町農協	秋田県湯沢市字西松沢二九二	茨城県東茨城町駒渡一〇八三	札幌市菊水上町四六	
六二一六五七	二四一七二〇				二一九二二 内線三〇五					二一〇三二										
朝日生命札幌支社 医長 N 2 W 3	北星学園大学教授	三菱化成工業 四日市工場長	国立岩木療養所長	岡山大学 道庁農務部改良課	日本製鋼室蘭製作所研究所副所長	室蘭市茶津町四 主任	広島村農業共済組合家畜診療所主 主任	(石岡アルコール工場長) 東京通商産業局	住友ビル大日本鋳業 K K	北大水産学部水産化学	瓦 土 建(自営)	鳥取大学農学部助教	函館水産高校			北東農産化学工業株式会社	関内科小児科医院	県立水戸工業高校	道庁農務部畜産課	
二四一九三二					二一〇三一					二一〇三一										

氏名	卒業年度	住 所	電 話	動 務 先	電 話
林 健爾	一六農	実			
門 池 正夫	一六農	実			
半 沢 宏	一六工	機			
福 光 幸彦	一七 医	医			
岡 田 光夫	一七工	土			
石 川 恒	一七農	畜			
白 取 善三	一七農	実			
小 林 五郎	一七工	電			
山 根 乙彦	一七農	畜			
前 田 正義	一八農	実			
大 戸 進	一八農	林			
小 池 栄一	一八工	土			
阿 部 孝	一九工	電			
坂 井 弘	一九農	化			
田 口 暢茂	一九 医	化			
稻 葉 恵一	一九農	化			
福 岡 邦泰	一九農	農			
富 塚 治郎	二〇農	畜			
岸 田 幸三郎	二〇農	化			
羽 島 栄治	二〇工	木			
		兵庫県西宮市松山町 国鉄甲子園アパート工の三〇六			
		札幌市南一四條西九丁目 四六			
		福山市東深津町二九〇			
		札幌市元町三五四番地七八			
		大阪市高槻区天神町二丁目 一六の一五	五二七五九		
		札幌市琴似町宮の森一九			
		北海道生産農業協同組合連合会			
		旭化学工業KK社長			
		北大工学部教授			
		福光延寺堂院小児科			
		札幌市役所土木部長			
		北大獣医学部教授			
		大成軽ブロックKK取締役社長			
		沖電気工業株式会社有線研究所			
		鳥取大学農学部教授			
		雪印乳業 興部工場長			
		三井木材工業(名古屋支店) 名古屋工場次長			
		北海道電力札幌支店土木課長			
		農林省中国農試			
		道立千才病院(千才市東雲町一丁目)			
		日本油脂KK佃工場			
		道庁総合開発企画部開発計画課長			
		東京都青梅市 東京都種畜場			
		国鉄大阪工事局停車場課長			
					二五二三二一代

木全 幹雄	二一農	化	東京都杉並区清水一丁目六番八号 六番八号	自衛隊陸上幕僚監部第四部研究班
山崎 治夫	二一工	治	不明	狩勝石鹼工場長
宇津見 千之助	二一農	畜	栃木県小山市横町二二〇六	県立巻農業高校
上野 新次	二二農	農	転居先不明	日本放射性同位元素協会
和田 晴	二二農	畜	網走市網走支庁農務課畜産係	
田之上 家久	二六農	水	東京都三鷹市牟礼公団住宅 三鷹台団地一〇の一〇四	
後藤 義英	二八農	獸	札幌市円山西町二の九七	札幌市西保健所衛生課長
齊藤 善一	二八農	畜	弘前市若党町七九	弘前大学農学部(弘前市文京町)
佐藤 徹	二八農	畜	東京都中央区日本橋雪乳 雪印乳業技術部	雪印乳業技術部
下飯坂 隆	二八農	畜	静内郡静内町御園	北大日高実験牧場
鈴木 敏夫	二八農	畜	空知郡江部乙町江部乙高校内	江部乙高校
渡植 貞一郎	二八農	畜	前橋市岩神町二八〇	群馬大学
薦野 保	二八	獸	群馬大学医学部内分泌研究所内	北海道農業試験場 根室支場
永井 重翁	二八農	獸	北海道標津郡中標津町 北海道農業試験場 根室支場内	岩手県水沢市新小路一番地 雪印乳業KK水沢工場
梶谷 晴男	二八農	水産	大阪市生野区新今里町五の一七 尼崎市西大町四五	大阪化学合金KK研究室研究課長
吉本 正	二八農	畜	仙台市荒巻中才一三の七	宮城県宮城農業試験場 (仙台市原町畔江二九)
福島 務	二九 医		札幌市琴似町二二五 (アメリカ留学中)	北大産婦人科教室

二一三  
二四一  
内三五九

氏名	卒業年度	住所	電話	勤務先	電話
阿部 晃一郎	三〇工	紋別市鴻之舞清明寮		住友金屬釷山鴻之舞釷業所	
鎌田 正人	三〇農畜	浦河郡浦河町西幌別	浦河 三一八四	KK 鎌田牧場	
田中 浩	三〇工			神戸市葺合区	
正富 宏之	三〇理	釧路市鶴ヶ岱三 市立郷土博物館		神戸製鋼所溶接棒事業部 釧路市立郷土博物館長	
齊藤 成俊	三一農			(釧路市鶴ヶ岱三)	
佐伯 和夫	三一獸	白老郡白老町萩野第三石山		北海道信用農協連岩見沢支所	
(旧性石塚)				昭和工業KK	
大久保 利彦	三一	天塩郡豊富町公営住宅二一の三		雪印乳業KK	豊富七六
小長谷 善行	三五水	札幌市界川町四九五		幌延工場酪農課豊富駐在	
荒川 清	三二		三一四六五二	NHK I T V	
榎本 幸人	三二理	淡路島町岩屋神戸大学理学部 岩屋臨海実験所		札幌トヨタ自動車KK	二一八一九二
岡部 満雄	三二農	札幌郡手稲町一〇八一八		北三条西五丁目 道庁畜産課	
齊藤 実	三二	富山市高原本町九六		道庁N3W5畜産課	
富沢 寛	三二林	逗子市山ノ根三一―二―一〇		不二越鋼材工業KK	
伊藤 亮	三三			日本揮発油(三重県四日市市)	
松田 環	三三医	札幌市北一四条西一四丁目		農林省中国種畜牧場	
柴田 久男	三四工	北海道江別市对雁一番地 北電アパート		(広島県加茂郡河内町入野) 札幌医科大学法医学教室	六一―二二二 内線三五六

今田 哲	三四農	化	西宮市甲東園二一八五		武田薬品研究所	
生田 勝一	三四	經	札幌市苗穂町四三		読売新聞報道部	
菅原 照雄	三四文	哲	札幌市北四西六 北四条アバウト九〇三		(札幌市南三条西一丁目) 毎日新聞北海道支社	二四一三二二
土井 敦	三四農	畜	札幌郡手稲町字前田		ホクレン農業協同組合連合会企画課	
山本 智	三四	水	樺戸郡浦臼町字浦臼内一四区	六三三九七七	浦臼高校	
村山 哲	三四	經	札幌市円山西町二〇九二	六二一〇七〇一	北電労務課	
栗津 健太郎	三四	水	札幌市南一条西一七丁目		銀座屋(製パン業)	
佐伯 雄二	三五農	畜	徳島県名西郡石井町川原二二二 一森永社宅		森永乳業KK	
本橋 幹久	三五農	畜	札幌市北二条西二三丁目	六一八四一四	大同製鋼KK	
奥野 静子	三五文	英	(片山方) 愛知県知多郡横須賀町大字加木屋字南鹿持一八大同製鋼知多寮		北大医学部大学病院第二内科	
(旧性片山)		化	札幌市北三六条西三丁目栄久荘		大学院学生北一四西五	
佐藤 典子	三六	医	東京都品川区豊町四の一五七		虎ノ門病院インターン	
高林 嬉子	三六	医	山王荘		北大大学院	
(旧性高階)		教	札幌市北六条西一〇丁目 林靖子方		雪印乳業KK販売課(福岡市呉服町)	
小山 毅	三七	教	北九州市小倉区金鶏町二の五六の二の五六の四天風荘		二〇 第一生命ビル内)	
千葉 祐記	三七農	畜	茨城県西茨城郡岩間町全販連内			
広岡 暢夫	三七農	畜				

氏名	卒業年度	住 所	電 話	勤 務 先	電 話
森 弘 肆	三七工 精	名古屋市北区辻町一丁目 大隈鉄工所第一寮	七二七八〇九五	東大大学院薬学部文京区本郷七丁目 三番一号	八二二二二二 内七一九
四 柳 智 久	三七医 薬	東京目黒区岡山二一五一二五 若竹荘	七二七八〇九五	東大大学院薬学部文京区本郷七丁目 三番一号	八二二二二二 内七一九
伊 藤 公 一	三七 医	札幌市南二五条西一二丁目		北大医学部(帯広市帯広厚生病院 インターン室)	
木 塚 信 次	三七 畜	藤沢市鵜沼桜ヶ丘三一三一五	七二二二九二	北大大学院	
市 川 端 彦	三八理 物	札幌市北三二条東六丁目 井上武志方	七二二二九二	北大医学部	
小 出 秀 達	三八 医	横須賀市海軍病院内インスタン復舎		北大医学部	
田 中 セ ッ 子	三八農 工	三重県四日市市栄町八一〇	二一四四一七	産経新聞四日市通信部	
宮 崎 健	三八文 露	兵庫県竜野市楫西町土師		農林省兵庫種畜場	
恩 田 正 臣	三九農 畜	農林省兵庫種畜牧場内			
入 江 喜 美 子	三九 薬	東京都渋谷区西原町二一一三 鈴木浦方			
小 林 則 子 (旧性寺江)	三九農 畜	札幌市北一条東七丁目一三 すみれ荘	七二〇五五	天子女子大	
田 村 雅 英	三九工 合 化	東京都人王子市大和田町一四〇〇 小西六大和田寮内		小西六	
高 木 佑 太	三九農 畜	札幌市北一〇条東一〇丁目 台糖フアイザー寮		台糖フアイザー札幌出張所 (南一西三大大ビル四階)	
小 島 武	三九医 薬	兵庫県神戸市兵庫区吉田町 一の三二 鐘化研究所和風寮		鐘ヶ淵化学	

95大堀慧子	94八木多賀子	93松尾英彦	92高野文彰	91黒沢道雄	牧竜子	滝沢迪子	(旧性御坊田)	吉田賢一	菅野弘	大木誠示	野田行文	横田肇	水野佑亮	松永武彦	滝沢南海雄	萩原雅典	八木正己	三浦清一郎	荒木伸也	
四一法	四一文	四一水	四一農	四一工	四〇	四二(見込)	四〇工	四〇農	四〇農	四〇理	四〇農	四〇農	四〇理	四〇工	四〇理	四〇	四〇理	三九	三九水	
札幌市北一〇条東八丁目	札幌市北七条西八エルム荘	札幌市北二条東九丁目	日本技術開発三鷹寮	東京都三鷹市牟礼九八一二	横浜市保土谷区常盤台三六二	札幌市南一条西一九丁目	札幌市北一条西五丁目	日本揮発油内	横浜市南区最戸町一〇〇	東京都目黒区八雲町四丁目	一九の一 勇魂寮内	登別町字米馬二七三青雲荘内	東京都東村山市萩町三九の四	中外製薬久米川第二寮	札幌市宮の森四三九柳沼方	千葉県茂原早野三五五〇誠和寮	札幌市北一条東五丁目加藤方	札幌市北七条西八丁目佐々木方	札幌市南一六条西五丁目	熊本県下益城郡南町隈庄
																			城南局四九	
																			七二七四〇	
																			家事手伝	
																			北大大学院	
																			光星高校北一三東八	
																			定山溪鉄道	
																			北大理学部植物	
																			日立製作所茂原工場	
																			北大理学部大学院(化学)	
																			北大農学部	
																			道庁畜産課	
																			雪印乳業	
																			日本揮発油	
																			札幌光星高校	
																			札幌医大中央検査室	
																			日本鋼管	
																			日本技術開発コンサルタント	
																			日魯漁業	
																			七二七六一	

氏名	卒業年度	住 所	電 話	勤 務 先	電 話
高松 正信	第二 代部長	世田谷区松原町四の二九四	三三二一六七五二	玉川大学教授(北大名誉教授)	
中谷 勝紀	附 五工 機	杉並区清水町二一六		飯野重工業	
岩垣 敏夫	六農 機	新宿区百人町四の四二〇 新宿住宅RA一五		農工大農学部教授	
河崎 秋三	六農 畜	八王子高倉町一の五五三	七二七三三四八四	東京都競馬組合八王子牧場	〇四二六二 六七九七
永松 四郎	七 〃	太田区千束町七七	〇四七三三	永松商事	〇四七三三
武田 朝男	八 〃	品川区小山六の四四五	九四八八	千葉畜産工業(株)常務取締役	九六一
東園 基文	九農 畜	渋谷区八幡通二の二三	四六一一六五六七	宮内庁待從職参事	四〇一〇四五二
植村 勘一	一〇農 畜	目黒区鷹番町四五	七二二〇三九〇	プレス工業(株)常務取締役	〇四六六二 三二〇〇
本田 恒康	一〇工 機	千代田区紀遅井町四の一	三三二一五五四	ゲミダイズ独乙染料(株)	二二一六三三
大迫 明德	一一理 化	世田谷区宮坂一丁目一四番九号		雪印乳業取締役	二七二七七二
吉見 一郎	一一農 經	北多摩郡狛江町小足立六二〇	四四一七八四四	大同製鋼(株)東京診療所長	七〇一四一六九
滋賀 秀明	一二 医	港区芝白金三光町三六四			
前野 正久	一二農 畜	目黒区中目黒一の八五二		森永乳業中央研究所長	
小笠原 義顕	一三工 電	川崎市宿河原二二三	〇四四八 三六〇九	日本電気(株)通信機事業部無線工場検査部長	七二一四二〇二
桶本 勝登	一三農 經	杉並区荻窪一の一九七	三九一五三三三	人事院東京事務所長	五八一七三
松平 伸	一三農 經	渋谷区景近町五六	四七三三三九二〇	日本ビール(株)目黒工場製麦課長	四四一三二八二
黒沢 良雄	一三農 經	茅ヶ崎市小和田四三二二	〇四六七〇 八六七六	日本長期信用銀行第四部長	二一五一一
池内 武夫	一四農 畜	世田谷区若林町二六六	四四一三六一	日本中央競馬会中山競馬場長	〇四七三三 一一八二
小田 昇	一四 〃	伊東市宇佐美二七八七 ホテルカスガ	四一四一三六	実業	

田中	千村	種口	渡辺	栗原	範直	千田	加藤	加藤	岡本	古谷	武田	小林	大手	平井	秋吉	中尾
純介	美幸	幹夫	俊弘	康	直道	哲生	昌太郎	昌太郎	洗	昌司	府幸	正英	英夫	宏知	照忠	敦司
三五	三四	三四	三三	三三	三三	三一	三一	三一	三一	二八	二二	二〇	一九	一八	一六	一五
林	經	法	応	鉦	動	獣	物	畜	畜	地	畜	化	電	林	鉦	鉦
清水市宮代町六	中野区鷺の宿六の七八二	市川市若宮町三の二四四一一号 世田谷区上馬町二の一三	埼玉北足立郡戸田町下戸田 北炭アパート 社宅一二	板橋区下赤塚七六下赤塚公務員	藤沢市辻堂北町二五五七	世田谷区弦巻町三の六二一	杉並区善福寺町二一一一五一一三 志村一の二の六〇三号	国分寺町戸倉新田九二四板橋区	草加市草加松原団地D五八棟 二〇四号	浦和市別所西野台一一一〇	武蔵野府境南四の一四六一 国際航業社宅 二六番一〇号	新宿区西大久保二の二一九	杉並区阿佐谷北三丁目	町田市南大谷字玉川学園六四一	杉並区馬橋二の二二五	杉並区天沼三の五八一
九九一	一四一	四九九					三五二	一五八〇	四	〇四八二		三八五	一六四一			
富士合板廠	日本中央競馬会中山競馬診療所	東京都人事委員会議験課 内線 三六四七 〇四七三 一〇八一	北海道炭鉱汽船株式会社石炭化学研究所 〇四八四(三一) 二八八〇	通産省鉦山保安局鉦山課 内線 八三四	癌研究所病理部	日本中央競馬会競走馬保健所研究所 九八四一〇六一	加藤動物病院 三九九一四六一〇	防衛庁陸上幕僚監部 三〇一四二二	十条製紙機研究所 九九一五二〇	古谷製菓株式会社東京企画室長 八三一七三〇	国際航業機研究所 三三一六二二	日華油脂機企画課長 五七一五八八二	東京都庁経済局農林部畜産課副主幹 二二二一五一二	技術部管理課長 七二一四二〇	北海道合板協会常務理事 二二一六六七	住友ビル大日本航業株式会社 二二一六七二

氏名	卒業年度	住 所	電 話	勤 務 先	電 話
長谷川 邦夫	三五 法	杉並区久我山二の七一〇 岩崎通信機内		岩崎通信機働會計課	三九八一一九二
森本 俤次	三五 農 林 産	埼玉県春日部市大字中野字 辺の発七三〇		松下木材働營業部	二三八一 二五四六
佐伯 雄二	三五 農 畜			森永乳業区徳島県名西郡 石井町川原二二二森永社宅	
河原 紀之	三六 理 地	目黒四の一六四〇阿部方	七二一三三二	アジア航空測量働写真真判読研究所	五〇一八四七六
湯浅 正之	三六 農 畜	武蔵野市冊窪四一一 伊藤忠三鷹寮	〇四三五 五〇九五	伊藤忠商事働畜産課	六六一一二七一
吉田 享	三六 工 衛 工	小平市花小金井一七六一 山川荘		高砂熱学工業働技術部	二五一七二二
大場 善明	三七 文 史	練馬区桜台一の三六 上原方		読売新聞社広告部	五六一〇二二 内線 六〇七
鶴見 好博	三七 理 化	台東区上野桜木町二三 江戸川化学翠江寮	六四一八〇四八	三菱江戸川化学働研究所	二五一〇二九
小島 杏介	三七 水 産	港区芝白金猿町二	四四一人〇九二	東京都淀橋保健所	八二二二二 内線 七二
四柳 智久	三七 薬	日黒区大岡山二一五一二五 若竹荘		東京大学薬学部製剤学教室	
田中 セツ子	三八 農 工	世田谷区玉川奥沢三の二二		高千穂交易(東京都目黒区 柿之木坂八二四)	
高林 嬉子	三八 医	品川区豊町四の一五七山王荘		虎ノ門病院インターン	七八一六八七
玉沢 一晴	三八	埼玉県浦和市南浦和一の二四 太田方		山之内製薬働研究所	九六六四三三
岡田 征至	三八 法 産	川崎市木月大町九八拓銀木月寮		北海道拓殖銀行築地支店	五四一五二四 七一一五七二 内線 三〇五
志水 一允	三八 農 林 産	江東区深川三好町二の一六	六四一八〇四八	農林省農試験場	

現 役 部 員

清水 洋	三八農 畜	茨城県真壁郡関城町	九四一上三〇一	農林省大宮種畜牧場茨城支場 (関城一〇二)	八二一・二二二
原 重一	三八農 農	大宮種畜牧場茨城支場 文京区大塚坂下町九九	三八五・八六八五	東大工学部交通計画研究室	七六三・二七二
堀川 芳男	三八農 畜	中野区高田二の一六		室幸水産物食品部管理係	

氏 名	学年学部学	現 住 所	帰 省 先
小粟 紀彦 (41)	4 農畜	札幌市北七西十二秋田北盟寮	東京都目黒区月光町一六三
加藤 孝志	4 医	北二十二西二協和荘	秋田県南秘田郡五城目町富田
近藤 喜十郎	4 文史	北七西十二米沢寮	名古屋市中区古渡町五の十六
山村 勝	4 農林	北十四西二新居方	山形県米沢市上花沢片町一九七二
高橋 昭夫	4 獣医	北二十一西二清和荘	青森県八戸市山伏小路六
八木 沢守正	4 理生	北五西二十五	東京都目黒区八雲二の十九の九
加藤 正義 (41)	4 工衛	北八西八桑園寮	大分県大分郡床内町南大津留二五六
田中 義明	4 工精	北二十三東四石垣方	岐阜県郡八幡町尾崎
阿部 勝彦	3 農林	小樽市長橋町四五	同 上
五十嵐 章	3 法	札幌市北七西十三進修寮	旭川市南二十四丁目
池田 統洋	3 工機	北二十七西十	小樽市最上町十六
入江 圭	3 工衛	北十六西五村田方	東京都世田谷区成城町八三
加藤 光一	3 農化	北七西八エルム荘	埼玉県大宮市高鼻町一の三四六
仙波 和子	3 教	北十三西三西野方	秋田市八幡字一里塚二一〇の一
高倉 宏輔	3 獣医	北十八西六静山荘	大阪府南河内郡美陵町藤井寺一〇八の六二
降旗 正忠	3 工電	北七西十二仙台寮	長野県松本市外浅間六五八
三田 新	3 工衛	北二十七西二清和荘	埼玉県浦和市岸町七の九の十四

氏名	学年学部	現住	帰省先
山本紘明	3 経	札幌市南十一西二十	同上
阿部約子	2 教理	北六西十三女子寮	函館市駒場町一五二
石田秀人	2 "	新琴似九一九中原方	神戸市須磨区行幸町三の六の二
遠藤裕子	2 "	北十三西三西野方	旭川市春光町四条八六
角田卓彦	2 "	小樽市最上町十六	同上
佐藤榮治	2 "	北大恵地寮	旭川市一条十丁目左十号
齊藤張樹	2 教文	札幌市北十九西二市島方	埼玉県南埼玉郡董田町
齊藤勝雄	2 教理	澄川十二	同上
武田正宣	2 教水	北二十七東二河西方	群馬県桐生市宮前町一の二一二一
田中力	2 教理	北二十三東二成毛方	東京都三鷹市井の頭三の七の十
坂本弘一	2 "	北二十八東十二小嵩方	東京都足立区上沼田町七九
竹内真	2 教文	小樽市緑町二の二十七三浦方	同上
寺崎弘恭	2 教理	札幌市大通西二十八築山荘	鹿児島県贈嗟郡大崎町仮宿一〇三一
春田恭彦	2 教理	北十八東三石田方	東京都葛飾区水之水合町一二五四
浜岡秀洋	3 工機	北十一西五ウエニガ1方	高知県土佐清水市旭町五の二
福栄敬介	2 教理	北十一東三伊藤方	東京都武蔵野市吉祥寺南町五の十八の五
村井弘一	2 "	琴似町山の手三条三丁目久保田方	三笠市多賀町十八
山本進	2 教水	北二十七西三柴山方	河東郡畜更町京太狩
安岡徳三	2 教理	南十二西十六	大阪市南区今尾

物故者

氏名

菅間威	石川正吉	下条規	永田敏敏雄	富樫稔	岩崎婦一	九鬼誠之助	愛甲屢寿家	真鍋雅彦	沢田鶴松	辻村憲吉
昭15	在学死去	昭14	在学中死去	"14	"10	"8	"6	"5	昭4	元配属将校
農畜		農畜		農実	工電	農化	農実	農畜	工鉱	
						昭6主任				

松本久善	安達信一	山本亨	福本途夫	小林誠平	蛎崎愛男	水倉寛	佐藤誠	山本義則	佐藤誠亀
第五代部長	"23	"19	"17	"17	"16	"16	"15	"15	昭15
元農学部教授	医医	農農	理化	農化	農実	工土	農実	理化	農実
				昭17主任					

## 編 集 後 記

○ 雪の降りしきる昨冬、追コン迄にはと部報作製に着手しました。しかし、理想と現実の壁は意外に厚く、追コンもおわりようやく雪もとけ始める春四月になり発行にこぎつける事が出来ました。前任者も歎いていましたが予想以上の原稿の集まりの悪さには我々編集委員の怠慢さが大部分を占めていたとは思いますが、部員諸兄も今後の部報の為に考えて欲しいと思いません。

○ 今年こそはと我々部員一同頑張ったではありませんが、七帝戦優勝を除いてはさほどかばしい成績ではありませんでした。しかし来年度はその努力を一つの踏台として好成績へと導きたいと思えます。

○ 最後に寄稿された方々、又厳冬のさなか広告取りに奔走して下さった部員諸兄、ありがとうございました。

(高 倉)

部報第十一号

昭和四十一年四月発行

発行者 北海道大学体育会馬術部

(札幌市北十七条西六丁目  
北大体育会内)

編集者 部報作成小委員会

印刷所 北大生協プリント部

世界のコーヒーが  
味わえるスタンド

最も優れたコーヒーと和洋菓子

パーラー **石田屋**

札幌市北3条西3丁目 TEL ②1872  
②7776

コクのある北国の味

らーめんのだ

**い ろ り**

札幌市北15西5  
TEL 77-6960

直管

**三**

昭和の春

**鈴**

札幌市南5西4  
電話 6781